

神様が降りてくる



このテキストは再配布可いたします。
気に入ってくださった方は、
ご自由におともだちやお知り合いにさしあげてください

心理カウンセラー このはなさくや

■著作権について■

このテキストは著作権法で保護されている著作物です。
下記の点にご注意ください。

このテキストの著作権は、このはなさくやに属します。
著作権者の許可なく、このテキストの全部または一部をいかなる手段においても複製、転載、流用、転売、公開等することを禁じます。

このテキストの開封を持って、下記の事項に同意したとみなします。

このテキストは秘匿性が高いものであるため、著作権者の許可なく、このテキストの全部または一部をいかなる手段においても複製、転載、流用、転売等することを禁じます。

著作権等違反の行為を行った時、その他不法行為に該当する行為を行った時は、関係法規に基づき損害賠償請求を行う等、民事・刑事を問わず法的手段による解決を行なう場合があります。

契約に同意できない場合は、作成者であるこのはなさくやにその旨を通知し、本テキストの返却と削除を求めます。

このテキストに書かれた情報は、作成時点での著者の見解です。著者は、事前許可を得ずに誤りの訂正、情報の最新化、見解の変更等を行う権利を有します。

このテキストの作成には万全を期しておりますが、万一誤り、不正確な情報等がありましても、著者・パートナー等の業務提携者は、一切の責任を負わないことをご了承願います。

～はじめに～

こんにちは。心理カウンセラーのこのはなさくやです。
東京をベースに、カウンセリングおよびセラピー活動を展開しています。

個人の成長、人間関係、健康、ライフワーク、経済問題等、
さまざまな分野をオールラウンドに扱います。
なかでも男女関係・パートナーシップの癒やしをもっとも得意とし、
まぐまぐ！から、“True Love～真実の愛～”というメールマガジンを発行しています。

メルマガのほかにも、ブログ、SNS、twitter、YOUTUBE 等、複数のメディアを通じて、
まず自分自身を無条件で徹底的に愛することからスタートし、パートナーに、家族に、
友人に、知人に、仕事を通じてご縁のあった人に、社会に、日本に、そして世界に
幸せと豊かさをわかちあっていくためのメッセージを日々発信中です。

メディアでの情報発信活動を続けてきた過程で、損得勘定なしに、こころから共鳴し
合える、幾多のすばらしい友人たちとの出会いがありました。

わたしにとって、こうした出会いは、お金では買えない、魂の糧と呼ぶべきものです。

わたしは、彼らを、“心友”と呼んでいます。

この愛すべき心友たちの一人に、詩人として活動中の、三条翔也(さんじょう・しょう
や)さんがいます。

先日、翔也さんから、彼の手による小説を見せていただきました。

150ページにもわたる大作でしたが、ファイルを開けたとたん、みるみるうちに引き込
まれ、ご飯を食べるのも、トイレに行くのも忘れて、一気に読了してしまいました。

そしてそのわずか3分半後、わたしは彼の携帯に電話をしていたのです。

「翔也さん、これ、イイ！すっごくイイ！！この作品、このままにしておくの、もったい
ないよ！もっとたくさんの人に読んでもらうべきよ。翔也さん、これ、無料レポートにし
て配布してもいいかな？」

一瞬の沈黙ののちに、受話器の向こうから返ってきた翔也さんの明るい声。

「もちろん歓迎だとも！ぼくの作品が、ひとりでも多くの人のお役にたたせていただけ
るのなら(笑)」

これがこの無料レポート誕生のいきさつです。

あなたの魂に、翔也さんからの魂のメッセージがとどきますように。

このはなさくや

神様が 降りてくる

三条翔也

この話はフィクションです。 実在する人物とは一切関係ありません。

目次

第一部『走り終えたとき』

プロローグ	9
第 1 話『二重人格』	1 0
第 2 話『よろしくね〜♪』	1 5
第 3 話『部活』	1 9
第 4 話『慢心』	2 2
第 5 話『新人戦楽しみ!』	2 7
第 6 話『どこまで行くの?』	3 0
第 7 話『新人戦終了』	3 4
第 8 話『ゆなの目標』	3 7
第 9 話『新しい目標』	4 1
第 1 0 話『明日は決戦』	4 3
第 1 1 話『スタート』	4 6
第 1 2 話『走り終えた 3 人』	5 0

第 2 部『8 番レフト』

プロローグ	5 6
第 1 話『8 番レフトの人生』	5 7
第 2 話『こんな神様引き取ってくれ!』	6 2
第 3 話『お金持ちへの道』	6 6
第 4 話『扉を開けたら・・・』	6 9
第 5 話『吐き出す』	7 3
第 6 話『パートナー』	7 6
第 7 話『特別な能力』	7 9
第 8 話『自己開示』	8 3
第 9 話『楽しい毎日』	8 9
第 1 0 話『かなめの課題とは?』	9 1
第 1 1 話『新たな一歩』	9 4
第 1 2 話『ありがとう、神様』	9 9

第3部『神様が降りてくる』

第 1 話『ボクは君に会いにきたんだ』	1 0 4
第 2 話『アイツは何者？』	1 0 9
第 3 話『かなめの正体』	1 1 3
第 4 話『本当？』	1 1 6
第 5 話『本心』	1 1 9
第 6 話『電車』	1 2 2
第 7 話『虹』	1 2 7
第 8 話『かなめが笑った』	1 3 0
第 9 話『すべては自分が作っている』	1 3 4
第10話『誰が悪いの？』	1 3 8
第11話『俺一人の力でも』	1 4 0
第12話『十分』	1 4 3
第13話『神様が降りてくる』	1 4 8
あとがき	1 5 1

第 1 部

『走り終えたとき』

■プロローグ

今ここに。ケーキがある。

私は甘いものが嫌いで、ケーキなんて大っきらいなのに・・・

何故か私はケーキを食べている。

そして、何故か涙が流れている。

ポロポロ・・・ポロポロ・・・流れている。

なんだろう？なんか悲しい。

何が悲しいのかわからないのに。

今日はすごく楽しいことがあってお祝いの日なのに。

なんで嫌いなケーキ食べながら泣かなきゃいけないんだろう？

なんで・・・

■第1話 『二重人格』

『私は二重人格です！』

なんて言ったら信じてもらえないかな。
そうだね。
頭おかしいと思われるよね。

でもさ、本当なんだ。
本当の二重人格とはちょっと違うけどね。

私の名前は田村 あみ。
中学校2年生の女の子。
部活は陸上部。

部活の大会で思うような結果がでなかったの。

「自分はなんてダメなんだろう・・・」
なんてため息吐きながらぼ～っとしながら歩いてたらさ、
右からクラクションの音ブ～ッっていう大きな音がしたの。

車が来ていることに気づかないで私は横断歩道を歩いていたみたい。
あっ！って言う暇なんてなくて、自分の状態を理解することもできなかった。

わけがわからにまま私は車にはねられた。
漫画みたいにヒーローが助けてくれるなんてなかったし、
避けることもできなかった。

・・・でも代わりに声がした。

「へへん♪任せて！」

多分この時に私は二重人格になったんだと思う。
車にはねられた私は数メートル吹っ飛ばされた。
普通なら大量の血を流したり大怪我するのかもしれない。

でも私は全くどこも痛くなくて、打撲一つなく、しっかり2本の足で立てた。

ううん。

しっかり立ってないかも。
だって、私の意識で立ったわけじゃないから・・・

私の意識とは別に、何かが立ち上がらせたの。
そして、ものすごいスピードで走り始めたの。

すごいスピードだったよ！
風のように走るってこのことなんだなって思った。
自転車で走ってもこんなに風を切って走ったことはない。

とにかくすっごく速かったよ！

でも、それもつかの間。
10メートルぐらい走ったらブチッって音がしてぱったり倒れたの。

1秒もない瞬間だったけれど
本当に風を切った世界だったな。

ぱったり倒れた私に
車の運転手が駆け寄ってきた。

人通りが少ない場所だったから私が走ったのは誰も見ていない。
運転手は車に跳ねられて私が10メートルぐらい飛ばされたと思ったらしく、
とても心配していた・・・

その後救急車で運ばれて診察しても外傷はなく、
左足の肉離れという車にはねられたにしては珍しいケガに終わったの。

「あたたたた・・・まさかこうなるとはな～
やっぱ考えて行動しなきゃな！うん。」

うんうん。そうだ。
考えて行動しなきゃ！
ぼ～っとしてちゃいけないよね。

.....

.....

って何の話！？っていうか誰？

????

「って・・・あれ？なんか・・・体が・・・わあああああ」

「わっ！」

ヘッドホンを最大音量にしたような音が頭に響く。
あまりの音の大きさにびっくりして声が出た。

なになに！？

何がおきてるの？

コレは誰の声？

「あ・・・乗り移ってしまった・・・や・・・やっほ～・・・聞こえてる？」

耳に聞こえるのとは別のところから声が聞こえてくる。
頭に直接響いてくる声。

.....

何この声・・・

怖い・・・

気持ち悪い・・・

私、幽霊にでもとりつかれたの？

本当は死んじゃったのかな？

ここは病院。
幽霊がいてもおかしくはない。

今までにない感覚を味わって背筋がゾクリとする。

修学旅行なんかでは怪談話で盛り上がるけれど
とりつかれた私は一体どうなってしまうのか・・・

「あ～いや～幽霊じゃないんだよ～」

そうか。幽霊じゃないのか・・・

ってアンタは誰！？

っていうかなんで私の思っていることがわかるの！？

「うう～そう言われても詳しい説明が～・・・」

なんだか幽霊にしては弱気だ。私をとって食えるわけでもないらしい。
姿が見えないのは恐ろしいが、ここは病院だ。まだ明るい。
人も近くににいるから呼べる。
目に見えない幽霊も周りに人がいると思えば意外と怖くない。

うまく幽霊を捕獲したらテレビに出られるかな？

「そうそう。怖がらないで～大丈夫よ～」

・・・

だからアンタは誰なんだ！？ってば！

この幽霊らしいけれど幽霊でないものは人の心が読めるらしい。
なかなかやっかいだ。

「いや。別に会話ができるわけじゃなくて
強く念じられたことはわかるだけだよ。」

・・・

「あ～ごめんごめん！違うんだよ！え、え、えっと・・・説明ね！
しばらく一緒に住むことになった、かなめだよ♪よろしくね～」

住む？どこに？

かなめ??

「住むってここだよ～キミの体。頭と言ったほうがいいかな？
かなめってボクの名前だよ。やだな～も～」

はあああああ????

さっぱり話が読めない。

「あ～ま～そうだよね。フツーは混乱するよね。ゆっく～りきいてね。」

・・・

このあとなんだかわからない幽霊ではないらしい幽霊(?)
かなめの話を私はきかされた。

病院で親や運転手がなにやらもめている。
そんな話をきいているより、
かなめの話を聞いている方が暇つぶしになってよかった。

■第2話 『よろしくね～♪』

ボクの名前はかなめ。神様学校に通う神様見習い。
神様見習いってのは神様学校に通う人たちのこと。
神様学校に通う人はみんな将来神様になることを願っている。

専門学校に通って資格を取って仕事につくようなイメージかな。
ちょっと違うのは神様学校は卒業すればすぐ神様になれること。
あと、卒業が難しいこと。

卒業できずに寿命がなくなった人もいるらしい。
ボクは寿命がなくなる前には神様になりたいな。
ま。ボクは優秀だから楽勝だろうけどね！

なんて思っていたら成績が悪いて地上に落とされたの。

「あなたは大切なことを学ぶ必要があります。」
だって。

そうは言っても、
それしか言われてないと何をすればいいかわからないんだよね～
先生神様も頭悪いな～
説明不足で指示が曖昧なんだよね。

しかもボクの実体がないの。
幽霊みたいなもので、人間には見えないし、
フワフワと空を飛べるし壁抜けもできる。

でも、実体がないから物にふれられないし、
走ろうとしても足が中を掻いて飛ぶことしかできない。

なんだか不便だよね。
せっかく地上に降ろすならもっと良い待遇にすればいいのにさ。

優秀すぎるってのも困ったものだ。
普通感覚がわからないからね。
ボクの感覚は先生神様じゃわからないんだろうな～
天才とはいろんなことに気づいてしまって孤独なものだ。
まったくまったく・・・ぶつぶつぶつ・・・

考えれば考えるほど愚痴が出てくるし、
神様って無能だな～と思うけれど、
ないものねだりしても仕方ないから町を見てみた。

そしたら女の子が車にひかれそうになってたの！

「へへん♪任せて！」

人間を助けるなんてお手の物。見習いと言えどもボクは神様だからね。
人助けをすればきっと何か良いことが起きるだろうと
ボクはとっさに女の子体を突き飛ばして車から守ろうとした。

・・・けど・・・

女の子は動かなかった。

げ！！

しまった！自分には実体がなかったんだ～と思った瞬間、
何が起こったかわからないけれど、
体に衝撃が走って、目には空が映ってた。

.....

ピクッ・・・

手がある・・・足がある・・・体の血の流れを感じる・・・

そうか！！！！

仕組みはわからないけれど、ボクは自分に体が戻ったと思った。
やった～！と思って走り出したけれど、
ブチッと音がしてパタッと倒れたの。

「多分あみちゃんと同化してしまって、その後吹っ飛ばされたんだろうね。
で。今こうしてあみちゃんの体と一緒に病院にいるわけ。」

.....と言うのがかなめの説明だ。

「ま、今思えば当然だよ。ボクは元々足がすごく速くて、
神様学校の中でも速いの。
人間で言うとかかなりのスピードになる。
そんなボクの走りに肉体がついてこれるはずがないよね。
中学生の女の子なんだもん。」

ま〜一応ボクが体の中にいるから
体も強靱になっていて肉離れですんだんだろうけれど。」

(でも肉離れは治らないなんて万能じゃないんだね〜微妙〜
しかも人に移るなんて幽霊と変わらないじゃん。本当に神様なの?)

「幽霊なんかと一緒にするな！
ボクのおかげで助かったって言うのにお礼の一言も言えないのか！
人間ってやつはどうも態度がでかいな〜」

(あ〜も〜うるさいな〜はいはい。わかりましたよ！
ありがとうございます。感謝しています。神様だということも認めます。)

「ふむ。わかればよろしい。」

(で。その神様かなめはいつ私から出て行くの？
肉離れで済んだのは感謝しているからさ。そろそろ出て行ってくれる?)

「・・・あはははは〜」

(笑ってごまかさないで！ちょっとだけ走れて良かったでしょ？
もう出てってよ！頭に誰かいるっていい気分じゃないの！)

「ん〜ま〜そ〜だよ〜うんうん。そうだそうだ。ボクもそう思う。うん。」

(だったら出て行ってよ！)

「いや〜それがさ〜・・・出られなくなっちゃった ♪」

(はあああああああ?????)

「ってなわけでは出る方法がわかるまでよろしくね〜♪」

そんなこんなで私は神様(?) かなめと
頭の中で共同生活することになった。

ああ〜・・・なんでこんなことに・・・

■第3話 『部活』

かなめから話を聞かせた翌日は夢だったんじゃないかと思ったけれど、残念。

「ふわぁ～～～・・・おっはよ～♪」

なんて妙に軽いノリの声が頭に響いてきた。
はぁ～先が思いやられる・・・

最初は気が重かったがだんだん慣れてきて、
気づいたら1ヶ月が過ぎていた。
未だにかなめが私の中から出て行く気配はない。

私に迷惑がかかるとわかっていて、
2人でいるとき以外かなめは話しかけてこない。これはありがたい。

かなめに気を使っていたら脳みそがパンクしちゃうもん。
かなめって神様だけど今は何にもできないんだって。
できることと言ったら私の感覚をそのまま味わうことぐらい。
使えない能力だよ～

かなめは甘いものが好きだけど私は嫌い。
でも、たまにかなめがうるさいから甘いケーキを買って食べあげてる。
そうするとかなめはご機嫌だ。

私にとっては甘いもの食べるなんて嫌なのだけれど、
かなめが静かならなんとか我慢できる。
頭の中でうるさいのってホント辛いからね。

こんなに苦労しているのだから何か良いことはないかと、
中間試験の時に幽体離脱してカンニングできないか試してみたけど
できないんだって。

そうだよ～。
よく考えたら私から外へ出られるならとっくにでてるよね。
そもそも神様見習いとかでそんな悪事の手伝いはできないって言われた。
神様って頭が固いからやりにくいところもある。
この前は拾ったお金を交番に届けなさい！なんて言うんだもん。

10円だったら誰も交番に届出ださないと思うんだよね。
誰も拾わないよって言ったら神社に奉納しなさいって言われた。
神社って神様だから結局自分の懐かよ、って言ったらそれも違うって言われた。

ま〜神様はお金なんて使えないから違うと言えば違うかもね。
私もそんなにかなめを責めたって仕方ないから特に何も言わなかったけど。

私は陸上部。普段は陸上部の練習のため、毎日走っている。
軽度だった肉離れは治って今も元気に走ってる。

「ねーねー、ボクにも走らせてよお〜」

(絶対にダメ！)

「ケチ〜」

な〜んてやりとりがたまにある。二度と体を貸すもんか。
この間肉離れしたことをもう忘れたのかな。神様の頭は意外と軽いらしい。

かなめはいつも私の頭の中にいるだけだから
たまには体を動かす感覚を味わいたいみたい。

でも、体を渡すって怖くてできない。
いくら神様だって言われてもさ。私も年頃の女の子だしね！

かなめもその辺をわかっているのかあまり強くは言ってこない。
それはありがたいと思ってる・・・って私の体だから当たり前なんだけど！

私の中学校陸上部の女子部員は4人。2年生2人と1年生2人。

大きな大会の個人種目に出られるのは3人。
だから部員全員個人種目に出られるわけじゃないの。
でもリレーは4人でやるものだから全員大会には出られるんだけどね。

大会に出られるって言っても
やっぱりたくさん走りたいから個人種目も出たいよね！

私は2年生だから大丈夫。もう一人の2年生の子は私より速いけれど、
1年生はまだ入ったばかりで私よりだいぶ遅い。

今まで先輩が出ていたから個人種目なんて出られなかったけれど、
これからは個人種目でも大会に出られる！
なんだか楽しいな〜♪

私が1年生の時も部員4人だった。
リレーには出られたけれど個人種目も出なかったな。
自分だけ取り残されたような気がしてちょっと悲しかった。

でも今は違う。私は部内で2番目に速い有力選手。
普通に練習していれば大会に出るのは間違いない！

練習を終えた帰り道、
ちょっと気が早いけれど大会のことを楽しみにしている。

これから夏休みを終えて、たくさん練習して、
秋の新人戦だな～ドキドキ・・・

そんなことを考えて過ごしていたら
あっという間に夏休みが終わって秋の新人戦になった。

かなめはまだ、私の頭の中にいる。

■第4話 『慢心』

「ね～」

「・・・・・・・・」

「ね～」

「・・・・・・・・」

「ね～ったら～」

「・・・・・・・・」

「ねーねーねーねーねー！！！！！！」

「あ～っ！も～うるさいな～！何っ？」

私は今一人で静かにしていた気分だったのに
かなめがお構いなしに声をかけてきた。
神様にデリカシーってものはないのかな？

「何をそんなに落ち込んでるのさ～？」

「うるさいな～何でもいいでしょ！かなめには関係ないでしょ！」

「そんなに負けたこと気にしてるの？」

「・・・・・・・・」

実は今日、新人戦の個人種目に出るメンバーを決めるレースをやった。
結果、私は3位だった。
新人戦には出られることになっているけれど、
1年生に負けたのがすごくショックだった。

ついこの間入ってきたばかりの子。
後輩だと思ってかわいがっていたら
私のほうがいつの間にか遅くなっていたなんて・・・

「あみちゃんさ～、落ち込んだってしょうがないじゃない。
あみちゃんの方が遅いんだからさ～」

「うるさいな！バカっ！」

遅いって言われたくない。私の方が遅いことぐらいわかってる。

でも言われたくない。

「バカとはなんだよ～バカはあみちゃんだよ～
自分が負けた理由、わかってないでしょ？」

「理由？遅いからって言うんでしょ！？もういいよ！」

もしかなめが私の前にいたのなら、私は飛び掛っていたかもしれない。
取っ組み合いのけんかをしかけたかもしれない。

私の頭の中にいるかなめに何を言っても消えないことに
今ほど苛立ったことはない。

「違うよ。そうじゃなくて！練習の取り組み方とかさ～心構えとかさ～
気持ち一つで負けることもあるし勝つこともあるってこと。」

「何？気持ち？勝つと思えば勝ったって言うの？私は勝つと思ってたよ！
全然疑わなかったけれど勝てなかったよ。何？何がいけないのさ？」

「ま～ま～ま～・・・ちょっと落ち着いて～」

「誰のせいだと思ってるの！？」

私は今誰とも話したくない。
落ち着きたいのにかなめが話すから落ち着かないのに。

落ち着かない原因を作っているかなめに言われていると余計腹が立つ。

しかもかなめの落ち着いた口調もなんだか腹が立つ。

どういう口調ならいいかと言われるとわからないけれど、
妙な自分との温度差に腹が立つ。

「何！？誰のせいだ！」

「お前だ！」

「えええええー！ボクのー！？なんで？どうして～？」

「あああああー！もー！面倒くさいっ！
どっか行って！話しかけないで！」

もう何もかもが面倒くさい。
かなめが私から出て行ってくれたらどんなに楽なことか・・・

「ったく。人間ってのは面倒くさいな～も～
でも・・・これだけは言わせて。
あみちゃんは人をなめていたんじゃないかな？
なめてかかると、真面目にやっている人には勝てないよ。」

.....

それきり、かなめは何も言わなくなった。

.....

人間を馬鹿にしたような言葉だけど・・・
これってかなめなりのアドバイスなのかな？

もしかして。私。かなめに心配されたのかな？
かなめなんか心配されてたんだ。
クスッ・・・

なんだか自分がおかしくなった。
かなめに心配されるなんて。

よっぽど追い詰められていたのかな。
すごく悔しかったんだろうな～

悔しさやショック、怒りがすっとおさまって、
自分を第三者のように冷静に見つめることができた。

「なんだ！なんだ！なんだ～っ！
その『かなめになんて』って～！ボクは神様だぞ！」

またかなめがしゃべりだした。

「はいはい。ごめんね。ありがとう。」

今までの嫌な気持ちがうそのようになくなって、
私はいつもの自分を取り戻したと感じた。

そうだね。かなめが言ったように
私はすごく相手をなめていたんだと思う。
自信過剰だったな。

自分は2年生だから負けるはずがない！
そんな風に思っていてレース前にも緊張しなかった。

走っている最中も勝てると思ってちょっと力を抜いている部分があった。
だから最後に抜かれてしまったような気がする。

ううん。今日の走りだけじゃない。
今までもそう。

練習中も何度も私は力を抜いていた。
『私には余裕がある、だから全力で練習する必要がない』
いつの間にかそんな風に思っていた。

陸上競技って走るだけだからこそ過酷なスポーツだと私は思っている。
人間は200メートルでさえも全力疾走できない。

だから練習の時は6～8割の力で何本も走ることになっている。
ペースは自分で決めるものだから楽をすればどんどん楽をできるし、
追い込もうと思えば追い込むこともできる。

私はいつも楽をして練習をしていた。軽く走っていた。

いつも真面目に練習して、毎回真面目に走って、
毎回集中して、最後まであきらめないで走っている人に、
私はいつの間にか追い抜かれてしまったのかもしれない。

でも・・・

今は負けているかもしれないけれど、負けっぱなしなんてつまらないよね！

私も力はきっとある！気持ち一つでもっと速くなれる！今からでも遅くない！
明日から真面目に練習しよう。真面目に競技と向き合おう。

「そうそう。その意気だよ。ボクはそれが言いたかったんだ！」

何を偉そうに。

でも、ありがとう。

■第5話 『新人戦楽しみ！』

かなめに言われてから私は真面目に練習するようになった。
そして、かなめのアドバイスを積極的に受け入れるようになった。

かなめは「やっとボクの力を必要とするようになったのか〜」
なんて神様として扱われているようで上機嫌だけれど、
私はあまり神様の力だって頼りにしてるわけじゃない。

そんなこと言うとかなめが機嫌悪くなるから言わないけれど・・・

かなめのおかげで自分の欠点に気づいたから
かなめがまた良いアドバイスをくれるんじゃないかと思ったからなんだ。

悔しいけれど本当にかなめのアドバイスはありがたい。

「100メートル走なら120メートルだと思って走るんだよ。
人間ゴールを見たら少し気が緩むものなの。
人間ってさ〜ホント面倒だよ〜
(かなめの自称天才話が延々と続くので中略)
だからゴールより少し先まで全力疾走するんだよ。」

「力んじゃいけないよ。硬くなるとフォームが崩れるからね。
あみちゃんのスピードなら絶対に抜けるんだから。
スタートで前に出られてもぜったに抜けると信じて走るんだよ。」

「練習から前に出るんだよ。
せっかく4人で一緒に走っているんだから先頭を走るの。
後ろを走ると無意識に後ろを走る癖がつくからね。
大会でも先頭を走るイメージができるようにいつも前を走るんだよ。」

「練習でも競り負けちゃいけないよ。
勝つと決めたら勝つんだよ。あきらめちゃだめ。
大会のときにここ一番の強さがなくなるからね。勝ち癖をつけるんだよ。」

たくさんアドバイスをもらった。
時々人をバカにしたような言葉を言うのが腹立つけれどね。
神様見習いだから完璧じゃないんだろうね。

走り方については先生のアドバイス、
ちょっとした私の癖なんかはかなめのアドバイスを受けて練習した。

練習したのはたった2週間だったけれど、
私に本当に必要な言葉をもらえて、
自分がすごく良い選手になっている気がした。

2週間前は落ち込んでいたけれど、
しっかりとした自信をつけて私は大会当日を迎えた。
私と同じ個人種目の100メートルに出るのは3人。

一人はもちろん私。どこまで自分の力が通用するのか楽しみだな～
私ともう一人の2年生ゆな。うちの学校で一番速い女の子。
1年生のころから先輩より速かったエース。
私もこんな風になれたらな～なんて思う。

私に勝った1年生のゆみ。
自分が速いのを鼻にかけたような性格なら悪者にできるのだけれど、
謙虚で良い子なんだよね～かなめに見習いなさい！
なんて言われたけれどお前が見習え！つつーの！
この大会でゆみにリベンジできたらいいな～

個人種目に出る3人と1人を加えて4人でリレーにもでる。

100メートルには出ないけれどもう1人の1年生のえみ。
私も1年前はえみと同じだったんだよね～
今はえみも遅いけれどだんだん成長してすごい選手になるのかな～
えみも素直な子なんだよね。
素直な子はどんどん伸びるから私も負けないようにしなきゃ！

この4人で大会に出る。

みんな今まで夏の暑い日を一緒に走ってきて、すごく日焼けしてる。
こんなにがんばったんだもん！大丈夫！きっと大丈夫だよね！

がんばるぞ～みんなで走るぞ～

シューズの紐をきゅっとしめて家を出るぐらいの気合がほしいけれど、
大会の更衣室で着替えるからそれまでは制服と革靴なんだよね。

革靴だとイマイチ調子が出ないけれど・・・

スウ～ッ

「行ってきま〜す！」

いつもよりちょっと大きな声を出して家を出た。

空は快晴。なんかいいことが起こりそう。

みんな同じ空の下走る。

みんなにいいことが起こったら、

私たちだけがいい成績を残せるわけじゃない。

それでも精一杯練習した結果を出せるように。

私はウキウキした気分で家を出た。

■第6話 『どこまで行くの?』

大会の結果は良好だった。

個人では同い年のエース、ゆなは上位入賞で県大会に出ることになった。

私とゆみは個人種目では決勝戦にも残れず、敗退。

でもリレーは入賞して県大会に出るのはきまった！

みんなで次の大会、県大会に出られる！

よし！明日からまた気を引き締めて練習するぞ～！

「あ・・・あのさ～」

人が大会に出られる事を喜んでいるときにかなめが話しかけてきた。

せっかく良い気分だったのに。

もうちょっと一人の世界で喜びたかったな～

ほ～んと神様って空気読めないよね～

(な～に～?)

大会で満足いく結果が出たのもかなめのおかげかもしれない。

怒らないで多めに見てあげることにした。

私はかなめと違って大人だからね！

かなめは私の頭の中にいる。

だから言葉を発しなくても思うだけで会話ができる。

今私は道を歩いているところだから声に出してかなめと会話したら

ただのヘンな人になっちゃう。だから心の中で返事をしたの。

「あみちゃんはどこまで行くの？」

(?どこまでって・・・家に帰るんだよ。)

「そうじゃなくて！」

(ん??)

「あみちゃんはどんな成績を残したいかってこと！

県大会で優勝したいの？全国大会へ出たいの？」

(ふ～ん・・・考えたこともなかったな。
私はただ部活をやっていただけだったから。

ただ走って、大会に出て、
良い成績が出せたらいいな～ぐらいに考えてたけれど・・・
それじゃだめなの？)

「ダメとは言わないけれど、目標があった方がいい成績がでるよ。
練習にも身が入るしね。」

(なんかかっこいいね！スポーツ選手みたい♪)

「『みたい』じゃなくてスポーツ選手でしょ！」

(あ。そうか)

なんか嬉しい。
スポーツ選手ってテレビに出る人で、憧れみたいな存在だった。

自分もそんな人たちと同じステージに立ったみたいで嬉しかった。

そっか。私もスポーツ選手なんだ～♪
なんかワクワクする。

「今回の大会の前、あみちゃんは1年生のゆみちゃんに勝つって
目標が無意識にあった。
個人でゆみちゃんと勝負することはなかったし、
県大会には出られなかったけれど、
そのための練習が身を結んで
リレーで県大会に出られることになったと思うんだ。」

(ふ～ん・・・そうなの？)

「そうなの！」

(へ～・・・あ！)

「どうしたの？」

(思い出した！去年ゆなにきいたの。どうしてそんなに速いの？って。
私は天才なのかな～って話したんだけど、

ゆなは「目標があるから」って言ってた。
その時は気にしてなかったけれどそれがゆなの速さの秘密かな～)

「そうかもしれないね。何か強い気持ちがあるのかもしれないね。
よし！じゃあ、あみちゃんも何か考えよう！」

(じゃあ私はゆなに勝つことにしよう！)

「へ～ゆなちゃんがあみちゃんの目標なんだ～」

(ふっふっふ。ゆなに勝ってゆなの目標を打ち砕いてやるー！
そして私が味わった敗北感を味わうのだ～！)

「何それ？」

(かなめは知らないんだよー！私が受けた屈辱を！！)

私が小学校6年生のとき、私より速い女子はいなかった。

だから中学生になった私は自信満々で陸上部に入った。
即戦力になってもいいよ？みたいな気持ちで。

そしたら先輩はみんな速くてびっくりした。
私なんか相手にもならなかった。

でも先輩は毎日走って練習しているんだからしょうがないと思ったの。
そしたら同い年のゆなも私より速い！！
入部したときから先輩と同じぐらい速かった。

幼稚園でも小学校でもず～っと一番を走ってきた私は
エリート気分だったけれど、
自分が全く歯が立たなくてすごくショックだったの。

きっとゆなも誰にも負けたことがないんだと思う。
だからゆなにもこのショックをゆなにも味あわせてやりたいんだ！

「・・・それってただの逆恨みだし・・・」

(いや！私は恨んでないから”逆”だね！)

「意味わからないし(汗)そういうことはやめなさい。」

(なんで～？)

「恨みとか人をおとしめようとする気持ちは
自分をどんどん落とすだけ。何の意味もないよ。」

(神様だからって偉ぶって～)

かなめだって人のことバカにしてるくせにね！
神様ってなんかやだね～

「何でもいいからやめなさい！もっと別の目標だよ～」

(ん・・・・じゃあ。県大会優勝！)

「大きく出たね～」

(うん！今回個人種目では出られないからリレーで県大会優勝！)

と言うわけで私は新たな目標に向けて練習をすることになった。

■第7話 『新人戦終了』

市の大会が終わってから私は県大会優勝を目指して練習している。

県大会まであと1週間だけれど・・・
一向に私の足が速くなったような気がしない。

本当に県大会で優勝できるのかな？
市で3位だった私たちが本当に優勝できるのか？

県大会にはもっと速い子達が出てくるはずだけれど・・・

う～ん・・・

「何考えてるの～？」

「あ。かなめ。」

今私は自分の部屋のベッドで考え事をしている。
誰もいないから声に出して会話しても問題ない。

「私達さ、本当に県大会で優勝できるのかな？
私、速くなった気がしないんだけどな～」

「県大会のレベルは知らないけれど、優勝は無理じゃないかな～」

「ええええええええー！！！！そんな～！！！！
目標があれば練習もうまくって、
優勝できるってかなめが言ったじゃないか～」

「そんなことは言っていないけど・・・」

「言った！言った！絶対言った！！詐欺だ！私の時間を返せ！！！」

時間を返されても仕方がないし、時間を損したとも思っていないけれど、
なんとなく文句を言ってやりたい気分だった。

今まで信じてがんばってきたのに・・・

「あみちゃん。人間はね。
人の言ったことを丸ごと覚えていることって少ないの。
自分の感情とかで言葉を理解して、思い込む。」

その思い込みだけ記憶していることがあるの。」

？

「だからね。ボクは目標を決めたほうが良い成績がでると言っただけ、練習もうまくいくとは言ったと思う。でも、優勝できるなんて言ってないよ。」

「え～！そうかな～？いいや！言った！絶対言った！！
そうやってすぐ自分だけ正しいって顔するんだから～」

「だから違うってば（汗）・・・県大会優勝はできると思う。
でも今回は厳しいと思うんだ。
1日や2日で速くなるものでもないからね～」

「えー！でも先生は走るフォームを変えれば
中学生・高校生ぐらいならすぐ伸びるって言ってたよ～」

「ま～それも間違いじゃないんだけど・・・
どうもあみちゃんの考えは極端だな～」

「何？私が単純だって言うの！？」

「違うけど・・・」

こんなやり取りをして、あ～でもない、こ～でもない、
とかなめと議論をした結果、
すぐには速くならないという結論が一つ出た。

目標を掲げるのはいいけれど、
それを叶えるためにはそれなりの準備期間が必要で、
スポーツの場合は練習が必要と言うことらしい。

走るフォームを変えて速くなることもあるけれど、
それからの練習も必要だし、
タイムを伸ばすためにフォームを延々と変える人はいないみたい。

あ～あ、なんか騙された気分。
気が抜けちゃうな～・・・

県大会、私達のリレーは優勝するどころか、予選敗退に終わった。
私達の結果は振るわなかったけれど、ゆなは個人で県8位という結果を残した。

県大会という大舞台で私はカチンコチンに固まってしまい、
自分がどんな走りをしたかさえも覚えていない。
ん～恥ずかしいな～・・・大会慣れもしないとね。

私はそんな結果だったのに、同い年のゆなの結果は素晴らしいものだ。
速いことはもちろんすごいけれど、堂々と走ることができることもすごい。

私の目標は県大会優勝よりもゆなにした方がいいんじゃないかな～

そんなこと考えながら新人戦は終わって、
次の春の大会に向けての練習が始まった。

今度は春の大会で県大会優勝すると決めれば時間があるから
目標も叶いやすいのかな？

かなめも春の大会なら可能性があると言ってくれた。
かなめのコーチも受けながら私は春の大会を目指して進むぞ～！

■第8話 『ゆなの目標』

新人戦が終わり、あっという間に冬が来た。
今、今年最後の練習が終わって着替えているところ。

うちの学校には女子更衣室があって、
部活をやっている子はみんなそこで着替える。

大体どこの部活も同じような時間に終わるから他の部の子と、
練習がきつかったとか、宿題の話とか、たわいもない話をしてる。

でも今日はどこの部活の子もいなくて、
何故か私とゆなの2人だけだった。

考えて見れば2年生になるけれど、
更衣室でゆなと2人っきりって言うのは初めて。

なんか落ち着かない。間が持たないと言うか・・・
黙々と着替えるのも変な気がして、
小声で「よいしょ」とか言いながら
会話のきっかけをつかもうとしてみる。

シーン・・・

ゆなは何の反応も示さないで黙々と着替えている・・・

なんか自分がむなしくなってきた。

う・・・なんか嫌だな・・・気まずいな・・・

なんかないかな～・・・なんか・・・
宿題とか・・・部活とか・・・あ！！

「ねえ、ゆな？」

「うん？」

「前にさ、ゆなの速さの秘密があるのか訊いたら
目標があるようなこと言ってたけどさ、詳しく教えてくれない？」

ちょっとゆなの目標が気になってたし、
ちょうどいい機会だと思って訊いてみた。

「いいけど・・・なんで？」

「あ～・・・その～え～っと・・・
ま～そろそろ今年も終わるじゃない？
私も来年の目標を考えていて
ゆなの目標が参考になるかな～と思ったからね～」

言えない。本当は無言が気まずかったからなんて言えない！！
でも我ながら筋の通った理由だと思う。
ゆなも不思議には思わなかったみたい。

「小学校のころ、ハナシくんって男子ですっごく速い人がいたの。
中学校は別になったんだけどね。
そのハナシくんが遅いってすっごくバカにされたの。
で、悔しいから速くなって見返してやりたいの。」

「ふ～ん・・・」

ん～たいした理由じゃないな～
そんなもんなのかな？

「私さ、それまでずーっと負けたことがなかったの。どんな男子にも。
でも初めて負けてすごく悔しかった。そんなときに。
『ノロマ』だの『バカ』だの言うんだよ！ヒドイと思わない？」

「・・・」

私は無言で頷いた。

私と同じだ・・・

私が中学校に入ってから感じた挫折を
ゆなはもっと前から知っていたんだな～・・・

「小学校の運動会のリレーでさ、ハナシくんと私は同じチームだったの。
私もがんばったんだけど負けたのね。
『負けたのはお前のせいだ！』とか
『お前がノロマだからいけない！』とか言われたの。
ホンっつっつムカツク！！！」

ゆなは普段おとなしくて、怒ることはあまりない。
そのゆながこうして怒っているのを見るのは初めてで、
目の前にいるのはゆなじゃないような気がした。

「ハナシくんも中学で陸上部に入っているの。
同じ県の学校だから県大会に出るのね。
私が良い成績残して見せつけてやるんだ！
それでね、『あんたがいるからあんたの学校は遅いの！』
って言ってやるの。」

新人戦で少し顔を合わせて話したけれど、
ハナシくんは県大会にも出られなかったみたい。
『あんた何位だっけ？』って訊いたら
悔しそうな顔をしてていい気味だったよ。

次は表彰台から見下してやるんだ！
見返すんじゃない、見下してやるの！」

例えばこの話をにこやかに話すのなら笑って済ませただろうけれど、
ゆなの表情はずっと真剣だった。
口調もいつもと違って少し厳しかった。

最初、話の内容はたいしたことないって思った。
でも、ゆなは怒っている。

・・・ううん、すごく傷ついたと思う。

私も小学校までは一番速かったけれど、
ゆなを見たときにすごくショックだったもん。
ゆなはそれより前にもっと大きなショックを受けたんだと思う。

ゆなはとても良い子で、私に『遅い』って一度も言ったことがない。
全くバカにしたそぶりを見せない。

「一緒に県大会に行こうね！」って言ってくれる。
だから傷つかなかった。

もしゆなが私を攻撃していたら、私もゆなのように思っていたかもしれない。
ゆなを負かしてやろうと思ったかもしれない。

それはすごく悔しくて、練習には力が入るかもしれない。
でもそれって楽しくないんじゃないかな～・・・

そんな風に思った。

そういえば前にかなめが
人をおとしめようとするのはよくないって言ってたな。
なんとなくだけど、わかるような気がする。

県大会優勝。立派な目標だけれど・・・

誰かに勝つ、って悪いとは思わないけれどさ。
何かと比較するんじゃなくて、楽しい目標がいいな～

■第9話 『新しい目標』

年末って面白くない。いつもやってるテレビ番組やってないし。
年末特番もいいけど、私は通常放送が見たいの！

チャンネル変えても同じような番組ばかりで
チャンネル変えるのも飽きたから今ついてるのを見ることにした。

年末だから今年の名場面とか感動シーンを集めて放送しているみたい。
名場面って言われても流れがあるわけじゃない？
その部分だけ見ても面白くないのにね～

何も期待せず、何気なく見ていたテレビだったけれど、
一つだけ目を惹くシーンがあった。

世界陸上のゴールシーン。
僅差で1位になった人と、僅差で2位になった人がいた。
でも二人は互いに笑顔で抱き合ってた。

何を言っているかはわからないけれど、
「おめでとう」「ありがとう」とか言っているんじゃないかな。

1位の人も2位の人も3位の人も嬉しそうだった。
メダルをとれなかった人も笑顔で握手やハグを交わしていた。

このシーンはすごく頭に残った。

勝つのは楽しい。負けるのは悔しい。
そう思ったた。

でも、負けても悔しくないことがあるんだね。
全力でぶつかって、自分の力を出しきって、
それで負けたら悔しくないかもしれない。

私もそんな走りがしたい。走り終わって笑いたい。すがすがしく笑いたい。

走り終わったとき、一緒に走ってくれた人みんなに感謝して、
笑顔で互いの栄光を称えあいたい。

あの笑顔になるには・・・一生懸命練習しなきゃいけないんだろうな。

一生懸命練習するからこそ、
苦しいことや辛いこともあって努力するからこそ、
心から笑えるんだろうな・・・

よし！

県大会で優勝するのも一つの目標だけど、走り終えたとき笑えること。
これも一つの目標だね。この目標は何より楽しい！これにしよう！

ゆなも走り終わったとき、人を見下すんじゃないくて、
笑えたらいいんじゃないかな。

笑えたら・・・いいよね。

「じゃあ、そうしよう！」

「わっ！」

いきなりかなめが話しかけてきた。
一人の世界に入って気持ちを入れていたのに・・・空気が読めないな～

「おどかさないでよ～」

「ま～ま～ま～。それよりさ、せっかく目標が決まったんだからさ、
明日は元旦なんだし、書初めしてみない？」

「書初め？げ～私習字嫌いなんだよね～手が汚れるしさ～準備面倒だし。」

「じゃ・・・ペンでノートに書くのはどう？」

「ペンで書くだけ？ならいいや♪手軽だからね！やることにしよう！」

「あみちゃんって・・・単純だね～・・・」

「うるさい！」

私は新たな目標を加え、新しい年を迎えることになった。

■第10章『明日は決戦』

年が明けて、私は笑い合えるように一生懸命練習した。
険しい顔しながら練習したわけじゃないよ。

もちろん練習はキツイから険しい顔をしていたこともあるけれど、
辛くなるような練習はしなかったよ。

楽しく、みんなが笑えるように練習したの。

小さな記録会もたくさんあった。
先生に頼んで大きな会場の大会にも参加させてもらった。

記録会って言うのは他のスポーツで言う練習試合のこと。
私は記録会にたくさん出て緊張しないように大会慣れしようと思ったんだ。
成果は県大会にならないとわからないけれど、きっと大丈夫だと思うな！

たくさん練習したおかげで記録もでるようになってきた。
記録がでるようになってくるとそれが自信になって、
なんか大丈夫って思えるんだよね～

もしかしたらゆなも自分が勝つ！
って強い気持ちがあるからあんまり緊張しないのかな。

季節は春になって・・・・・・・・

私は3年生になった。

春の大会が近づいて・・・・・・・・

とうとう明日は春の大会の個人種目に出るメンバーを決めるレースがある。

記録会に出てわかったけれど、私の記録はグンと伸びた。
自信もついた。油断するわけじゃないけれど、多分メンバーにはなれる。

前のように1年生の・・・あ、今は2年生か（汗）のゆみにも負けない。
もちろんもう一人の2年生のえみにも負けない。
新入部員の1年生は4人いるけれど、1年生は春の大会には出られない。

明日また4人で走るのか・・・

「あみちゃん！絶対に勝つのだよ！ゆなちゃんにも勝つんだよ！」

「うん。わかってる。」

かなめが私の頭の中に入ってからそろそろ1年が経つ。
かなめは私が一つ年下のゆみに負けてから一生懸命応援してくれた。

今の私がいるのはかなめのおかげかな。

かなめは私をばかにすることもあるけれど、
私をずっと応援してくれた。本当に嬉しい。

お礼は明日、ゆなに勝ったら言おうかな。
そうだ。かなめの好きな甘いケーキを買ってあげよう。

きっと喜ぶだろうな～

かなめと私は味覚がつながっている。
私は甘いものが嫌いだけれどかなめは甘いものが大好き。

時々甘いものを食べていたのだけれど、
最近はかなめが「食べ過ぎるとあみちゃんが太る！」と言って
食べなくていいと言ってくれた。

私を本当に応援してくれた。
一緒にがんばってくれた。

かなめは私を応援しているけれど、ゆなも応援しているらしい。
ゆなに目標を変えてほしいんだって。
人を見下すために勝つんじゃなくて、
走り終わって笑えるようになってほしいって。

私も同じ考えなの。

私が走り終わってから笑い合える人なら
きっと明日、ゆなも笑えると思うんだ。

ゆなを変えるには私が目標から外れないで突き進むことが一番！
ってかなめは言ってくれた。

確かにそうだよね。

自分のためにやることが人のためにもなってる、
なんだか面白いな～

明日、ゆなに勝つ。ゆなは負けたとき、
今まで嫌なことを思い出したかもしれない。
バカにされて傷つけられたこと・・・

でも明日から変わるんだ！負けても笑えるって、私が教えてあげるんだ！

■第11話 『スタート』

いつの間にか部活の時間が来た。

朝、昼、普通に学校の授業があったけれど、上の空だった。

「そんなに緊張してどうするの？りら〜つくす。りら〜つくす。」

いつもは学校では話しかけてこないかなめが
私をリラックスさせようとしてくれている。
授業中から何度も話しかけてくれている。

わかってるんだけどさ〜・・・なんか・・・その・・・
今まで意識してきたものが目の前にあるかと思うと・・・
今までの結果が全部出るのかとか考えると・・・

負けたらどうしようかな〜とか・・・
ゆなに勝って大丈夫かな〜とか・・・

みんな今まで一緒にがんばった。
夏は女の子なのにみんなすっごい真っ黒に日焼けしてた。
冬は寒い中走って時々鼻水が出てくることもあった。

みんながんばって大会のために走ってきた。
みんなで大会に出て、みんなで1位を取りたいけれど、
個人種目ではみんなってわけにはいかないんだよね。

うーん。みんながんばったからみんなに勝たせてあげたいな〜
私も負けたくないし〜・・・うー・・・

「余計なことは考えなくていいの！
いつもどおりに生活して、いつもどおり走るだけだよ！」

そうなんだけどさ〜・・・

「今まで練習してきたじゃないか！大丈夫だよ。
新人戦県大会の二の舞は嫌でしょ！？」

うん・・・嫌だ・・・でも・・・

「はあ〜・・・」

自分でも緊張しているのが損なのはわかっている。

なのにどうしても体がこわばってしまう。

私は緊張して浮き足立ったまま部活の時間を迎えて、ウォーミングアップを始めた。

・・・・・・・・

「あ〜みちゃん！」

「うわ〜っ！」

ウォーミングアップで校庭を走っていると、誰かが私の方をポンと叩いた。私は緊張のせいか必要以上に驚き、大声を出した上に飛び上がってしまった。

「だ・・・・大丈夫？」

声の主はゆなだった。ゆなが私に声をかけたのか。びっくりしたな〜

「だ・・・・大丈夫、大丈夫。なんでもない。」

平静を装ったけど、大きい声だして飛び上がったから説得力がない。

「緊張してる？」

「ししししし、してないよ！緊張なんか！
うん！してない。してない。ぜーんっぜんしてない！
大会の時だって緊張しないんだもん！
き、今日緊張するわけじゃないじゃない！！」

「・・・・なんか言葉おかしいよ。顔もこわばってるし・・・・
すごい緊張してるね・・・・」

やはりバレたか・・・・

「私達3年生は最後だからね。走る回数もそんなに多くないかもしれない。
だから後悔しないようにがんばろうね！」

「・・・・うん。」

ポンポンとまた肩を叩いてゆなは私の横を並走している。

・・・・・・そうだね。もうこの春の大会で終わりだからね。

今まで大会のために練習してきたんだもん。
緊張のせいで全力出せないなんてもったいないよね！

緊張している場合じゃない！私は全力で走るんだ！
ゆなのためにも・・・・・・

あれ？

でもなんでゆなに元気付けられているんだろ？
私がゆなを助けるはずだったんだけどな・・・・

どこかでくすくす笑うかなめの声が聞こえる。
何がおかしいんだか。

(かなめ！もう話しかけないでよね！
私はもう緊張してないから大丈夫なんだから。
今から集中するからね！)

「・・・・・・」

何も返事がない。
わかったってことかな？

ゆなのおかげで緊張がとけた私は
いつも通りにウォーミングアップのメニューをこなした。
そして、今日のメインメニュー、4人でのレースが始まった。

単純に言えば4人でのただの徒競走をするだけ。
誰が速くて速くないかを決める、
ただそれだけのこと。迷いも緊張もいない。

スタートの号令とピストルは1年生が担当している。
ゴールには先生と他の1年生がいて、順位を見極める。

ただの徒競走。でも、部活のみんなが見ている。
なんか。楽しいじゃん！

4人全員がウォーミングアップを終えて、
スタートラインについたところで声がかかる。

「位置について！」

ス〜ッと息を大きく吸い込み・・・

吸いこんだ空気を全て吐き出す・・・・・・

私はスタートの位置につく。

「よ〜い」

ゆっくり腰を上げて・・・

バーン

スタートのピストルが鳴った。

■第12話 『走り終えた3人』

「くすくすくす・・・ふふふ・・・」

1位にならなくても、もう平気かな・・・？」

ゆながあみを励ます姿にかなめは微笑んでいたが、
微笑んでいる間に異変が起きた。

(あれっ？ボク・・・)

「かなめ。」

(・・・この声は・・・)

誰かが自分と呼ぶ声がする。
声の主の方を見ると・・・

「先生！！」

「久しぶりですね。」

『大切なことを学ぶ必要がある』とかなめを地上に降ろした先生が、
かなめの頭上数メートルのところにいた。

「あれ？え？わーっ！」

気づくとかなめはあみの中から抜け出し、自分の元の体になっていた。
あみは一人でウォーミングアップをしている。

「もう、おしまいですよ。さあ、帰りましょ。」

「おしまいってなんですか！？え？ええええ～？」

かなめは混乱して何がなんだか分からない。
「全てはテストですよ。」

「テスト～？」

混乱するかなめに、先生神様はゆっくりと口を開いた。

「かなめ。あなたは自分のことばかりを考えていました。
自分が常に正しいと思い、他人を見下しているところがありました。
時には自分が神になるために、人を蹴落とそうと考えていました。
私があなを地上に降ろしたとき、
私が何の指示も与えなかったこと、
あなたは私を無能だと思いませんでしたか？
私を引きずり降ろして、自分が神になろうと考えませんでしたか？」

「う．．．．」

思い当たることがあるだけにかなめは何も言い返せない。
神様は嘘をつくわけにもいかないので違うとも言えないのだ。

「いいのですよ。それはあなたの本心ですから。」

先生神様は表情を崩してかなめを許した後、りりしい表情に戻った。

「しかし．．．
神になるのならそういう考えを見過ごすわけにはいきません。」

「はひ．．．」

かなめは少し気まずそうな表情を浮かべるが、
先生神様はまた微笑んだ。

「あなたには他人を尊重すること、他人のことを想うこと、
このような気持ちが不足していました。
ですが、もう大丈夫です。
あなたの1年足らずの地上での生活、しっかり見ていましたよ。」

(全てお見通しってわけか．．．)

かなめはここで、神様の奥の深さを改めて知った。
まだまだ自分が神様見習いで修行が足りないことを肌で感じた。

(叶わないね～)

自分が神様になるまでどれぐらいの年月がかかるかわからない。
でも、ショックでも悔しいわけでもなく、それを受け入れ、
かなめはすがすがしい気持ちでいた。

「あなたのすべきことは終わりました。さあ、帰りましょう。」

「帰りましょうって・・・あみちゃんは？」

「あの子は人間です。あなたと一緒にはいられません。
それに・・・もう大丈夫ですよ。ほら・・・」

先生神様が指差す方を見ると・・・

「あみちゃん・・・目標・・・達成できたね・・・」

かなめは表情を緩めて言った。

「神に関わった人間は神がいなると、神と共に過ごした時間を忘れます。
じきにあの子もあなたの記憶をなくすでしょう。別れはいりませんね？」

「はい。」

かなめは何の迷いもなく、先生神様の後に続き、神様の世界へ帰っていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「かなめ！もう出てきてもいいよ！」

あみは上機嫌で家に帰り、買ってきたケーキの箱を満足気にあける。

「見た～？しっかり見た～？私1位になったんだよ！すごく嬉しかった！
ゆなに勝ってさ～先生も褒めてくれたし、
ゆなも笑って握手してくれてさ～もう最高！！」

まだ落ち着かないのか、息をはずませながら言うあみ。
食器棚から受け皿とフォークを出して、
買ってきた2つのショートケーキの1つを皿に移し変える。

「はい、これ。お礼だよ。
かなめのおかげでこんなにいい気持ちになれたんだもん。
私もすごく変わったし、ゆなも救われた。本当に感謝してるんだよ！」

「・・・・・・・・」

「これから市の大会もあるし、県大会もあるよ？
でもさ～ちょっとぐらいケーキ食べてもいいじゃない？
今までががんばったんだしさ～
かなめも食べたいの我慢してくれたんでしょ？」

「・・・・・・・・・・」

「食べないつもり？
そりゃ～2つもケーキ買ったのははしゃぎすぎかな～って
思ったけどさ～・・・でもでもでも！
私だって少ないお小遣いをフンパツして買ったんだよ！
神様だったらありがたくもらったらどーなのよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「何？無視！？も～いいよ！
私はもうぜーったいケーキなんて食べないからね！
どんなに頼んでも食べないからね！大会が終わっても食べないからね！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「いつまで無視するの？ねえ、かなめ！！かなめ！！！！かな・・・・・・・・」

「・・・・あれっ？なんでケーキがあるんだろ・・・・
私・・・・ケーキなんて嫌いなのに・・・・」

ポタッ・・・

ポタッ・・・・ポタ・・・

なんで・・・涙が流れるんだろう？

なんで・・・ケーキを食べながらないてるんだろう？

第2部

『8番レフト』

■プロローグ

何か・・・忘れている。

何か、大事なことを忘れている。

子供が生まれることがわかった時、
私は何か大事なことを忘れていることに気づいた。

忘れることで人は大人になるのだろうか？

記憶のかけらをつなぎ合わせ、
私は時間をかけながら一つの物語を思い出した。

私が主人公の物語。

私を手助けしてくれた人物がいる物語。

誰もこの物語を知らない。私だけの物語。

もしかしたらあれは夢だったんじゃないかと思うこともある。

でもきっと、夢なんかじゃないと信じている。

夢にならないうちに、私とあいつの物語をここに書いておこう。

■第1話『8番レフトの人生』

あ〜・・・俺の人生、たいしたことなかったな・・・

思えば小さい頃から振るわなかった。
頭がいいわけじゃないし、
スポーツができるわけじゃない。

取り得がなくて女の子にもモテなかったな。

中学、高校と野球部だったけれど、
弱小チームで華々しくなかった。
打順8番、守備レフト。

同じ外野でもライトだったらイチローと同じだったのにな。

弱小チームで人数が少なかったから、
3年生と言う理由でレギュラーにはなったものの、
別にヒットが打てるわけじゃない。

9番は1番につなげる役割がある。
でも打順8番ってのは一番期待されない打順だ。

レフトもなりたかったわけじゃなくて、
ただ誰もやりたがらなかったから回されただけ。
そんな期待されない中高時代だった。

思えば俺の人生自体8番レフトなのかもしれない。
大学生活だって友達がたくさんできるわけでもなく、
ただなんとなく単位とってなんとなく卒業した。

就職は決まらなくて、アルバイト気分で警備員になった。
大学卒業したばかりの若い人間は
おっちゃんばかりの業界としてはありがたい。

22歳で警備会社で働いて3年が過ぎて、俺は25歳になった。

警備会社で働いていると言っても会社員というわけじゃない。
フリーターだ。
俺には職歴がない。

就職しようたって、キャリアも何にもないわけだ。
第二新卒でもないし、俺にはなんの魅力もない。

新しい仕事に就けるはずがない。
25歳という年齢だと、普通に就職したやつは結婚するやつもいる。
公務員のやつなんか結構いい給料もらっている。

俺はフリーターで、人を見送るだけ。
死ぬまでこの仕事をするつもりはない。

でも、時間が過ぎれば過ぎるほど若さはなくなり、
どんどん就ける仕事は少なくなっていく・・・

ただ若いってだけで重宝される。
そんな業界の警備の仕事はありがたかった。
特に何の取りえもない俺でもすぐ仕事できたからだ。

仕事仲間は40歳、50歳のおっちゃん。
でも、みんな自分の子供と同じぐらいの年齢だからか、
かわいがってくれる。

ありがたいこともあるけれど、やっぱりロクでもない人生だ。

だって、警備員やってるから俺は車に轢かれて
今こうして病院で寝ているのだから。

はあ～・・・

.....

数日後、長期入院するほどの怪我でもなかった俺は家に帰ってきた。

命がなくなったわけじゃないし、たいした怪我じゃない。
障害も残らなかったし、よしとしよう。

そうとでも考えなきゃやってられねーや。
8番レフトのロクでもない人生だもの。

そう考えながら部屋を見ると・・・

なんと、見知らぬ男が俺の部屋で
むしゃむしゃとケーキを食べていた！

一人暮らしの俺の家。
ワンルームの狭い部屋。
部屋の引き戸を引いたら人間がいた。

誰もいるはずのない部屋に生き物がいて動いているのだ。
こんな怖いことはない。
驚きのあまり俺の体には電撃が走り、
腰が抜けてドスンとしりもちをついた。

泥棒だ！

とにかく叫ばなくてはと声を出そうとするが、
恐れのためかうまく声がでない。

引き戸の音で気づいたのか、
しりもちをついた時の音で気づいたのか理由は定かではないが、
泥棒と俺の目が一瞬あった。

泥棒は目にも止まらぬ速さで俺に飛び掛り、俺の口をふさいだ。

「騒がないで！！怪しいものじゃないから！」

怪しいものじゃないって、怪しくないヤツが人の家に勝手に入り込むか！
なんで口ふさぐんだ！どう考えてもあやしい！
と、心の中でつつこむが、口をふさがれているために声はでない。

「あつと・・・えつと・・・いや！違うんだ！
口ふさいでいるけれどこれは叫ばれたら困るからで～
あ～でも叫ばれたら困るのは怪しいからじゃなくて～・・・」

男は自分を弁解しようとしているようだが
こんな状況では何を言っても無駄だ。

俺は騙されない！

こいつは俺を殺そうとしているのか！？

うちには金なんてないぞ？
実家も金持ちじゃない身代金を請求なんてやめろ！

馬鹿な真似は止めて大人しく家から出て行け！

「ん〜と・・・なんと説明すればよいのやら・・・
あ！！キミ、長澤タカユキくんでしょ？」

なにっ！？コイツ、俺のことを調べているのか！

一体何が目的だ！？

人に恨まれる覚えなんてないぞ？

何だ何だ何だ！！！？？？

「あ〜・・・いや〜！そういう意味じゃないんだ！
えっと・・・えっと・・・あの〜ボクを呼んだのはキミなんだよ！」

俺に泥棒の知り合いはいない！だいたい泥棒を呼ぶなんてどんなやつだ！
こいつは異常者か！くそっ！意外に力が強い！
もがいてもコイツの手をほどけん！！

「あ・・・いや〜あの〜だから・・・えっと・・・
『8番レフトの人生』をなんとかしにきたの！」

ピクッ・・・

「8番レフトの人生」それは俺が心の中で思っていたこと。
それをなんとかする？

俺の思考は一気に停止した。

「あ。ちょっと落ち着いたね。実はボク神様でさ〜・・・」

ガバッ！

渾身の力を込めて泥棒を突き飛ばし、手から抜け出すことができた。

神様だ？わけのわからんことをコイツは異常者だ。
8番レフトなんてどうでもいい。とにかく助けを呼ばなくては！
未来から猫型ロボットが来たと言ったって俺は信じないぞ！！！！

大声を上げようと大きく空気を吸い込んだ瞬間・・・

がっ・・・

「ふ～間に合った～暴れないでよ～・・・全く。乱暴だな～
大声なんて出されたらたまらないからね。」

突き飛ばされた泥棒が半身をを起こし、
片腕を俺の方に向けている。

何故か体が動かなくなった。口も動かない。
俺の体全体が全く動かない。でも呼吸は苦しくない。

何が起きているんだ？俺は夢でも見ているのか？

「今ね、君の心に直接話しかけているの。
映像は動かないように見えるだろうけどね。」

えっと、さっきの話の続きね。
ボクは神様で、キミを助けにきたの。」

助けに・・・だと？

泥棒が？

この後、俺は頭がおかしくなるほど、
自称神様という泥棒の話を聞かされた。

頭がおかしくなるほどって。
寝ても覚めても話を聞かされたのだから、
頭がおかしくならないわけがない。

結局こいつが神様だと言うことを俺は信じることになった。

■第2話

『こんな神様引き取ってくれ！』

「は～久しぶりの仕事はやっぱ疲れたな～」

車に轢かれてから初めての仕事を終えた俺。
たいした怪我じゃないから仕事に支障ないほど回復している。

でも駐車場の警備員は8時間も立ち通しでなければいけない。
それがなんとも辛いものだ。

慣れてくればそれほど苦ではなくなるけれど、
休みの後は体がリセットされたようで立ちっぱなしの辛さを感じてる。

ガタゴト、ガタゴト！！

あ、そうだ。忘れてた。
よいしょっと。
携帯ストラップをこするとストラップが人間型になった。

「うえ～気持ち悪う～おえ～・・・はぁ・・・」

人間型になった本人はうずくまっている。

・・・

先日俺の部屋に入っていた泥棒は自分のことを神様だと言う。
神様学校に通っている神様見習いで、
厳密に言うと神様とは違うらしいが・・・

名前はかなめ。かなめは普段神様の世界で勉強しているのだが、
学校の実習のためにこっちの世界に来たらしい。

今回の実習では俺の家の神様になったようだ。
実習を終わらせるには課題をクリアしなければならない。

でもその課題は知らされていなくて、
自分で課題を見つけて自分でクリアするそう。

俺の家の神様になった瞬間、俺から「助けて〜」という声が聞こえたらしい。
だから課題は家に住む俺を幸せにすることだろうと、かなめは思うようだ。

そんなわけで俺を幸せにしたいらしい。
じゃあ金くれって言ってもだめで、
俺が自分で課題をクリアして、
自分で幸せをつかめる力を手に入れなければいけないらしい。

課題、課題となんとも回りくどいやつらだ。
そもそも俺は「助けて〜」なんて言った覚えはないんだけどな・・・

でも幸せになるのを拒む理由はないから
別にいいかなと思った。

そんなわけで、俺を幸せにするために俺に1日中くっついて、
アドバイスをしようとかなめは考えた。

しかしながら家の神様だから家を出ることはできないらしい。
でも形を変えれば家の外に出られるそう。
変なところで都合がいい。

かなめのことは秘密で、誰にも話してはいけないらしい。
正体がばれると実習失敗だそう。
変なところで都合が悪い。

実習失敗したら呪ってやるとかなめに俺は脅されている。
神様のくせに呪うとはどういうやつだ？
ま。俺も幸せになれるのなら、と正体はバラさないことにした。

外に出るとき、かなめは何にでも形を変えられる。
問題はなにに形を変えるか？

ぬいぐるみに形を変えても
どこかで俺がぬいぐるみと話しているのを見られてはマズイ。
そもそも俺がぬいぐるみを持っていることが怪しいし。

そんなわけで携帯ストラップになってもらうことにした。
ストラップなら電話しているように見せればどこでも堂々と会話ができる。

・・・

そんなわけで今日1日かなめは携帯ストラップとして過ごしたが、
特に何も言わなかった。
そもそも何のためにきて、
俺に何を言いたいのかわかっていないが・・・

かなめが携帯ストラップから人間の姿になるという不思議な光景を見ても、
未だにかなめが神様とは信じられない。
全てがテレビを見ているような光景だ。

もしかしたら本当の自分は車にひかれて、
病院で寝たきり生活をしているんじゃないか？

そんな風に考えることもあるが、
ほっぺたをつねれば痛いため、現実なのかな～と考えている。

かなめはまだ何も言わずにうずくまっている。
俺と一緒にいたのがそんなに疲れたのか？
警備員はつかれるだろ？

立っていればいいだけかと思ったら、立ってるだけでもかなり辛いし、
立っているだけじゃなくて、
結構いろんなことをやらなきゃいけないのが警備員だ。

神様にも大変さがわからない仕事だったに違いない。
神様も大変さがわかったらもっと給料が上がるようにしてくれと思う。

「あ・・・を・・・」

か細いかなめの声が聞こえてきた。

「け・・・携帯ストラップってさ・・・
めちゃくちゃ・・・ゆれるんだよね・・・

気持ち悪くて・・・何も・・・言えなかつ・・・た・・・
今日はもうだめ～」

バタッ

うずくまってぴくぴくしていたかなめが力尽きて動かなくなった。

.....

.....

あーーーーー！

もう、やーだ！

なんでこんなやつうちに来たんだよ！

あ一面倒くせえ！

なんかすんげーつかれた！

あーもう、やだー！誰かこんな神様ひきとってくれーーーー！！

■第3話『お金持ちへの道』

かなめが俺の仕事についてくるようになって、1週間が過ぎた。
3日ほどは毎日家に帰ってくると具合が悪くなっていたが、
そのうち慣れてきた。

「神様は慣れが早いのだ！はっはっはっはっは一！」

なんて勝ち誇ったように笑っていたが、
そんなに自慢することかね～

仕事中、携帯ストラップになっているかなめが話しかけてくるは時々ある。
でも「ケーキ買って」なんて言うことがある。

大人しくしてろ！ってんだ。
神様ってみんな、こんなにのんきなのかね～

何で俺がこんなに真面目に働かなきゃいけないんだと思うと
たまに腹が立ってくるが、
そんなこと言っても仕方がないので
かなめのくだらない話は無視することにした。

今日は仕事が終わってから俺にアドバイスをくれるらしい。
長い話になるから仕事中には言えない、とだけ仕事中に言ってきた。
俺の1週間の仕事ぶりを見て思うことがあったようだ。
俺は夕食のカップラーメンを食べながらかなめが話を聞くことにした。

「タカユキくん。キミはわたしの話を聞くのに食事をしながら聞くのかね？」

「わたし」なんてかっこつけちゃって。

かなめは一応神様なのでそこはプライドが高いらしい。
正座まではなしなくてもしっかりと話をきいてほしいようだ。
面倒な神様だ。

「ま～ま～ま～。神様。
話は食事をしながら楽しいほうがいいじゃないですか！」

「う・・・うむ。まあ、そうか。よしとしよう。」

あっさりこんな安い言い訳に騙された。
神様って意外と扱いやすいかも・・・

「コホン。では、タカユキくんにアドバイスをしてあげよう。
キミはお金持ちになりたいのだよね？
お金持ちになるには今の仕事は適していないだろう。
お金持ちになるような仕事をしなさい。」

「・・・・・・・・・・」

「ま～いきなり仕事を変えろって言われても勇気がいるかもしれないけどさ、
大丈夫！ボクがついてるから！
うまく仕事に就けるようにアドバイスするからさ！
じゃ、早速仕事を探そ～♪」

「・・・・・・・・・・」

「な～に～？そんなに良いアドバイスでびっくりしたの？
も～しょうがないな～」

「・・・・・・・・いや、そうじゃなくてさ。ちょっと待って。」

「あん？」

俺はカップラーメンを食べるのをやめて一呼吸置いた。
かなめの話は飛んでいる。
話しがどんどん先にいってしまっただけで俺は飲み込めない。

かなめの話をさえぎり、自分のペースで考えてから俺は言った。

「俺、別にお金持ちになりたいわけじゃないよ。」

「ええええー！！！！
だってボクが神様だって話をしたときに
『金くれ』って言ったじゃーん！！」

「いや・・・ま～そりゃあ・・・そうだけどさ・・・」

「ね！ね？そうでしょ？そりゃそうでしょうよ～
もっとお金欲しくない？もっといい所に住みたくない？」

「ま～それもそうだけどさ・・・
っていうか8番レフトの俺なんかにできるの？
できるわけないって。」

「ふ～ん♪

人は自分の理解の範囲を超えたところの話をするとう混乱するものだよ。

タカユキくんは毎日警備員やって、

おじさんたちの不況話の渦にいるから

お金持ちになるって考えが出てこないんだよ。」

「うーん・・・」

「ほらほら、今すぐ行動しよ！行動の早さがお金持ちへの秘訣だよ。」

「あー・・・・・・・・」

そんなこんなで、俺は乗り気ではなかったのだが、
お金持ちになることへの道が勝手に開かれた。

■第4話『扉を開けたら・・・』

お金持ちになるため、新しい仕事を始めようとしてから3ヶ月が過ぎた。
相変わらず俺は警備員の仕事をしている。新しい仕事は見つかっていない。

一度経営者募集の広告を見て説明会行っていた。
どうも俺は乗り気じゃなかったのも、何もせずに帰ってしまった。

かなめに「やる気がないのか？お金持ちになりたくないのか？」
なんて言われて、説教を聞かされた。

結局「お金持ちになるんだ！」と意思表示をさせられた。
大声で叫んだり、紙に書いたり、いろいろやった。
かなめが言うには、自分で決めれば結果は必ずついてくるらしい。

でも、一向に結果として現れない。
書類選考で落とされたところ、面接で落とされたところ、
条件が合わないから自分で断ったところ、いろいろあった。

決まらないのは俺のせいだとかなめは言う。
俺が煮え切らないのがどうも気に食わないらしい。

「こんなはずじゃなかった。」
「前の人はずっと目標がしっかりしていた。」
「なんではっきりしないんだ。」

かなめもイライラするようで、時々小言を言われる。

かなめは励ましてくれることもあるけれど、キツイことを言うこともある。
俺は無理して笑顔を作って、元気に振舞うしかなかった。

俺はかなめが何故うまくいくと言うのかわからなかった。
大声で叫んだり、紙に書くだけで叶うなら苦労なんてない。

自分で決めれば結果はついてくると言っても、
決めた瞬間に会社から電話がかかってくるはずがない。

そもそも俺は8番レフトの人生を送ってきた何の取り得もないやつだ。
取り得がなくても長年勤めていれば
キャリアを積んでいるようにも見えるだろう。

でも、俺の履歴書は白紙で、本当に何も積み重ねがものがないのだ。

仮に就職できたとしてもその後仕事もうまくいくはずがない。
俺にできることなんてないのだ。

できることがあるのなら大学卒業と同時に就職できたはずだ。
そうは思いつつも、かなめの「うまくいく」と言う言葉を信じたかった。
早くうまく行ってほしかった。

そうすれば今の生活から開放される。
もっと楽になって、かなめがいなくなる。

幸せになるのはどうでも良かった。

俺はとても疲れていた。かなめの話を聞くのも嫌になってきた。
毎日毎日自分の周りをうろうろしていて、
時には親よりうるさい小言を言われる。

失って気づいたけれど、俺は今までの生活はとてもいい環境だった。
一人で生活しているのでいろんなことが自由だった。
何をしても誰にも怒られない。
仕事したって怒られることはめったにない。

すごく良い環境だった。
かなめが来て、いろんなことをやれと言われる。
やりたくないこともやれと言われる。

嫌だと言ってもやらされる。
結果なんて出るわけがないのに結果がでなくてダメ出しされる。

これがどんなに傷つくことか・・・

自分は神様だから何も間違いがないと思うかもしれない。
でも、俺にはかなめが間違っているとしか思えなかった。

もしかなめが会社の同僚や上司なら、家にいる間は離れられる。

でもかなめは同僚でも友人でもなく、俺の家の神様なのだ。
俺はかなめから一時も離れられる時間がなくて、
ストレスはたまる一方だった。

8番レフトの人生はロクな人生じゃないと思っていた。

でも、エースで4番の人生を送るには努力や苦労が必要なのだろう。

そんなに辛いのなら俺は8番レフトでいい。
そんな風に思っていた・・・

今日、ポストに手紙が来ていた。
不採用通知の手紙だった。

「う～ん・・・そのうちきつとうまくいくよ！」

かなめは俺を励まそうとしてくるが、その笑いが煩わしかった。

俺のために笑っているんじゃないくて、
俺を自分が思うようにコントロールするために・・・

「次はどうしよっか？どんな仕事がいいかな？
ボクはタカユキくんにはリーダーシップがあると思うから
そういう仕事もいいかと・・・」

うるさい・・・

「もういいよ。やめよ。」

「・・・・」

しまった！

つい口から言葉が出てしまった。

俺はいつもかなめの話をきいていて、
言い返すことはなかった。

でも我慢の限界を超えていた俺はつい言葉が出てしまった。
思わぬ言葉が出てかなめも驚いていたのか黙った。

「・・・・あ～・・・・」

考えないで言葉が出てしまったが、バツが悪い。
次の言葉が出てこない。何か言わなきゃ・・・フォローしなきゃ・・・

「やめるって・・・何を？」

「あ・・・いや・・・その・・・ま～・・・気にするな。疲れてるんだよ。」

ボタン！

作り笑いを浮かべて俺はトイレに入った。

はあ〜・・・

一人になれる場所がここしかないというのはなんとも情けない。

あ〜面倒だな。
かなめになんか言わなきゃな。
なんで余計なこと言ったんだろ。

弁解しなきゃ・・・かなめは傷ついたかな？

これから気まづくなったら・・・嫌だよな？
ずっと目の前にいるんだもん。

あ〜面倒くせえ・・・

この扉を開けたらいつもの俺に元に戻らなきゃ。

かなめの話をきいて、しっかり言うことを聞く俺。
今はうまくいかないけれど、きっとそのうちうまくいくのだろう。
かなめもそうは言ってくれる。

この扉を開けたら・・・

扉を開けたら・・・

戻らなくちゃいけないのか・・・

何故か俺の目からは涙が溢れてきた。

■第5話『吐き出す』

どうして俺は今こんなに辛いのだろう？
少し前までは元気に働いていたのに・・・

そうだ。

おかしくなったのはかなめが来てからだ。
あいつが来てからおかしくなったんだ。
あいつが新しい仕事を探せなんて言わなければ
俺はこんなに嫌な想いをすることはなかった！

俺は今までうまくやってたんだ！

お金はそんなにないけれど、
一人暮らしするには十分な収入があって、
自由で楽しい暮らしをしていた。

給料が安いって言う人もいるけれど、
俺はお金に困らないから別に不満はなかった。

仕事もみんな協力してくれて、かわいがってくれる人もいて、
すごくありがたい環境で楽しく過ごしていたんだ。

それをあいつが無理やり別の仕事を探せと言って、
採用されなければブツブツ文句を言って、
毎日説教する。

あいつがいなければ俺は楽しい生活だったのに！

・・・

妙にかなめの存在が邪魔なものに思えた。
あいつさえいなければ・・・

自分の気持ちと一緒に吐き出すつもりで
俺はトイレで用を足してからドアを開けた。

「ずいぶん長いトイレだったね～おなかの調子でも悪いの？」

「！！」

「おまえが来てから俺にはロクなことがないんだよ！
おまえが俺の生活をめちゃくちゃにしたんだ！」

俺は力いっぱい怒りにまかせて叫び、
近くにあったトイレトペーパーを投げつけた。

もしかかなめが俺に労わりの言葉をかけたのなら、
もしかかなめが俺を心配してくれたのなら、
俺の怒りは静まったかもしれない。

しかし、目の前のかなめはあまりにも無神経な言葉を吐いた。
その無神経さに、俺はもう耐えられなかった。

「おまえのせいで！！！！」

一度大声で叫び、ものを投げたら今までの怒りが全て爆発して、
俺は完全にキレていた。

かなめに向かって突進し、殴りかかろうとしたが・・・

いきなり体が動かなくなった。

・・・・・・あれ？

「いきなり何するんだよ～生活がめちゃくちゃってなんだよ～」

どうやらかなめが神様の力を使って
俺を動けないようにしたらしい。

「大体ボクは的確なアドバイスをしているのに
キミが使いこなせないんじゃないか～
困っているのはボクの方だよ。」

子供を相手にするかのように話すかなめに余計に腹が立つ。

「うるせえ！俺は幸せだったんだ！お前が来てからストレスだらけだ！
いいことなんて一つもねえんだよ！」

「・・・・な、なにお～っ！ボクがいれば幸せになるに決まってるんだ！
キミが悪いんだ！」

「うるせええええ！！！！バカヤロー！！」

「バカとはなんだ！バカとは～！」

.....

人に対してこんなに怒りを爆発させたのは何年ぶりだろう？
小学生以来かな？

俺はず～っと、怒りを表に出さないで腹に溜め込んでいた。
だから人と衝突することはなかった。
どんなに腹が立っても、表面は笑顔でいれば円滑にことが進んだ。

俺一人我慢すれば大丈夫。そんな風に思っていた。
仲が良い友人に対しても、仕事仲間に対しても、家族に対しても.....

気づけば自分を表現することができなくなっていた。
怒っていても、楽しいことを考えていても、
口にも表情にも出さない人間になっていた。

いや。出さないんじゃないくて、衝突を恐れて出せなかったんだと思う.....
すごく内気な人間になっていた。

そんな俺だったけれど.....10年ぶりぐらいにけんかした。

声の限り叫んで、胸の中にある不満を全部ぶちまけて、
思いつく限りの汚い言葉を吐いて、かなめにぶつけた.....

10年ぶりのけんかは.....

心地よかった。

■第6話『パートナー』

ボクはかなめ。神様学校に通う神様見習い生。
以前優秀すぎる能力があるためにこっちの世界に来たけれど、
今回は実習でこっちの世界に来ている。

この実習は課題をクリアしたら終わる。
課題は与えられていない。
課題を見つけること自体が実習の内なの。

ボクは実習のため、とある家の神様になった。
その瞬間、家に住んでいるタカユキくんから「助けて〜」って声が聞こえた。
「8番レフトの人生なんて嫌だよ〜」って。

タカユキくんを助けて、ついでに幸せにすれば課題クリア！
晴れて神様学校に帰れるわけ。

パパッと終わらせて帰ろうと思ってたんだけどさ、そうも行かないの。

8番レフトが嫌なのだから、4番でエースの人生にしようと思った。
そのために、タカユキくんをお金持ちにしようとしたの。

だって人間の世界で生きるのにはお金って必需品じゃない？
あって困ることはないじゃない。
お金があれば幸せかと思ったの。

でもタカユキくんは目標を決めてさっさとやればいいのに、
腰が重くて行動が遅い。
幸せになりたくないような感じ。

人間は仕事がうまくいってお金があれば幸せなはずなのに
タカユキくんがどうも煮え切らない。

前にこっちの世界に来たときは目標がある子だったから
もっと簡単に幸せにできたのにな〜
あ〜も〜いらいらするな〜！！

なんて思っていたら逆にタカユキくんがキレてさ、
怒りながら泣きながら騒いだ。

だからボクも一緒に売り言葉に買い言葉で、
たくさんタカユキくんへの不満をぶつけた！

ボクの方が怒りたいし泣きたいぐらいなのにさ。
全く、人間の身勝手さには困ったものだ。

な～んて思ってたんだけどさ、
タカユキくんの話も聞いてみると気持ちがよくわかった。
タカユキくんは元々幸せで、お金が欲しいなんて思っていなかった。

ボクが勝手にお金が欲しいだろうと思って、
勝手にボクの価値観を押し付けていた。

ボクはパパッと終わらせて学校に帰りたいという思いから
タカユキくんの気持ちを考えず、早く終わらせることだけを考えていた。
恥ずかしながら自分のことしか考えていなかった。

タカユキくんにはすごくストレスだったみたい。
神様のボクが（正式には見習いだけれど）間違えるなんて思っていなかった。
ボクが逆にタカユキくんの良さを殺しているなんて思ってもみなかった。

自分が不幸を与えているなんて気づきもしなかった。
まさか神様のボクがけんかするとも思ってなかったな～

ボクは神様と言う場所に立っているだけで
自分を偉い人間だと思って、タカユキくんを見下している部分があった。
ん～これじゃあ神様失格だね。

前と同じことを繰り返してしまった。
前にこっちの世界に来たときも人を見下していたな。
傲慢になってしまうパターンがあるみたい。
気をつけなくっちゃ！

ボクは神様なので自分を許せば神様が許したことになるので自分を責めない。
反省したからそれでいいのだ。えっへん！

ボクはもっとタカユキくんを尊重してあげよう。
もっとたくさん話をできるようにしてあげよう。

タカユキくんは内気でネガティブなところがある。

自分の意見を言って、自分を出すことが苦手で、
自分が8番レフトのたいしたことない人間だと思い込んでいて、
自分の可能性をつぶしてしまっている。

もっと自分の意見を言えるようになるといいのかな。
よし！タカユキくんに自分の意見を言えるようにしてあげよう！

そして、自分の能力に目覚めさせてあげよう。
8番レフトからエースで4番というポジションに立たせてあげよう！

タカユキくんとは思いつきりけんかしたあと、仲直りした。
互いに言いたいことが言えてすっきりしたんだろうね。

もうわだかまりはなくなった。
これから何をどうするかはまだわからないけれど、
タカユキくんを幸せにしてやろう！

以前のイライラした気持ちはなくなって、
ボクは本当にタカユキくんを応援する気持ちになった。

■第7話『特別な能力』

今日は同じようなことを3回言われた。
なんか不思議な日だったな～

・・・・・・・・

今日は中学校で同じ野球部だった友達のライブに行った。
中学を卒業してから音楽にはまり、
高校・大学と音楽生活に明け暮れていたようだ。

プロのミュージシャンになると宣言して、就職はしてないらしい。

話にはきいていたけれど、ライブに行くのは初めてだったから、
楽しみにして行った。

でも・・・

俺にはあんまりよくわからなかった。俺には歌がうまいとは思えなかった。
別に音楽のことは知らないけれど歌が下手だなんて感じた。

ライブは盛り上がっていて、なんか不思議な感じだった。
なんでもいいから音楽が流れていれば盛り上げられる人達なのかな？
そんな感想だった。

ライブが終わってから参加者が帰るときに
そいつは一人一人と握手をしたり言葉を交わしていた。

その時にちょっとだけ話した。

「おー！久しぶり～！来てくれてありがとう！マジ嬉しいよ」

「久しぶり。なんかすげ～な～・・・すごかったよ！」

「タカユキがやったらもっとすごいと思うけどね！」

「??」

「お前のカリスマ性ならもっといけるよ！」

「ははっ！じゃ、またね～」

ライブに来たからって調子いいな～
俺は軽く受け流した。

その後中学時代の野球部のやつらと約束していたから軽く飲んでいた。
その時に気になっていたことを訊いてみた。

「あいつの歌・・・どうよ？やっぱいいの？」

「・・・・・・・・」

一瞬空気が凍りついたように感じた。

聞いちゃまずかったかな・・・

「あ～やっぱり？みんなそう思うんだよね～」

一人が笑いながら口を開いた。

「実はさ～・・・」

話を聞いてみるとすごく面白いものだった。

あいつの歌がうまいと思っている人はそんなにいないけど、
みんなあいつが好きだから応援しようとライブに行くらしい。

ライブに行けばあいつの夢もつながるし、生活費の足しにはなる。
施しを受けるのは好きじゃないだろうから気づかれないように
手助けをしている人が多いそうだ。

本人がいる前では気を悪くするだろうから言わないが、
本人がいないときは「ヘタクソだよな～」と笑いながら
ヘタクソ話を酒の肴にしているらしい。

「は～人間性？性格？

それだけでそんな生き方ができるもんなんだな～すげ～な～」

俺は単純に思ったからそう言った。

「そう？タカユキなら出来そうなのに。」

「はあ？」

「そうだよ。タカユキなら出来そうだよ～」

「はははは」

俺はまた軽く受け流して、その場を終わらせた。

帰り道、電車で高校時代野球部で一緒だったやつに偶然会った。
ちよくちよく連絡を取り合っているやつだったから、
俺が今警備員をしていることなんかは知っている。

今日のライブのこと、
友達が自分を応援してくれる人を集めてライブをして、
それで生活をしていることは俺にとって衝撃的だったから話してみた。

そしたらこいつも言った。

「お前も出来そうなのね。」

「・・・・なんでみんなそう言うの？」

中学時代の友達に言われたのはみんな冗談だと思っていた。

でも、中学時代の友達とは関わりがないこいつにも言われるのは
ものすごく不思議な感じがした。

こいつも同じように俺をからかっているのか？

「あん？」

「ライブやってたやつにも、
その後一緒に飲んだやつらにも言われたんだけど・・・」

「じゃ～それは天性の才能があるんだね。」

「何がだよ。俺 8 番レフトの俺に何の才能があるんだか・・・」

「ははは。野球の才能はなかったかもしれないけどさ。
意外とお前の声にみんな元気付けられてたんだよ。
気づかなかったかもしれないけどさ。」

「？」

「リーダーってさ、チームを引っ張るのもいいと思うんだけどさ。
チームがピンチの時に下から支えてくれたりさ、
みんなが苦しいときに励ましてくれる人も
立派なリーダーだと思うんだよな～

どんな時でもなんとかなる気持ちにさせてくれる、
希望を見つけてきてくれる、
そんな人もリーダーだと思わない？」

「・・・・・・・・」

それきり何も言わなかった。

俺にはよくわからなかったが、これは俺のことなのだろうか？

俺は自分が何をしてきたのか思い返してみたけれど、
思い当たることは何もなかった。

・・・・・・・・

俺に何か特別な能力があるのだろうか？

なんか能力があるなら、活かしたいな・・・

■第8話『自己開示』

「タカユキくん！キミは経営者になるべきだ！」

今日の仕事を終え、ゆっくりと食事をしようと言うときに
かなめが大声で俺に指をびしっ！とさして言った。

「なんだよ。いきなり・・・」

あ～面倒くさい。
大概かなめの話は突拍子もない。

「この間さ、友達にカリスマ性があるって言われたじゃない？」

「カリスマ性があるとは言われてない。
ただ”元気づけられた”って言われただけだよ。」

「ま～同じようなものだよ。」

そうなのか？

「ここ数日のキミの警備員としての働きを見ていたけれど、
キミは経営者になる素質がある！」

「なんだよ。それ・・・」

「なんだかんだで2倍～3倍の年齢の人たちをうまく使って
現場を仕切っているじゃない？」

いや～あれはなかなか出来ないものだよ。
キミは出来る子だと思っていたんだよ！
でも環境が整っていない。
だから経営者になって人をうまく動かして
エースで4番の人生を歩むのだ～！」

ま～たなんか余計なことを言ってる。
お茶を一口飲んでから俺はゆっくりと口を開いた。

「あのね～かなめ。俺が現場を仕切っているのは運なんだよ。
偶然初めて現場に入ったとき、偉い人からマンツーマンで教えてもらって、
偶然次の日に社長が俺の仕事を見て、
『1日でこれほどできるとは・・・』って気に入られたの。」

でね、みんなが言うことを聞いてくれるのは若いからだよ。
俺が息子より若い年齢で話を聞いてくれるものだから
かわいがってくれてるの。
だから俺がすごいわけじゃない。

大体俺は8番レフトだから
経営者なんてそんなたいそうなことはできないんだよ。」

いい加減かなめの大きな夢を描く癖はやめてほしい。
ま〜押し付けてこないし、
小言を言うわけじゃないから前よりいいけどね。

俺も自分の意見を言うのがうまくなったな。

前はかなめの言うがまま、
言うとおりにしてストレスをためるだけだったのに、
今では軽く流せるまでになった。

すごい成長だな〜

「そー！」

ん？なんだ？

「そこが問題だ！」

「・・・どこ？」

「タカユキくんはね。いつも”8番レフト”って言う。
そうやって自分の可能性を否定しているんじゃないかな？」

あ。軽く流せるようになった話じゃないのね、と思った。
そりゃそうだ。かなめは俺の心が読めるわけじゃないからね。
そんなことを考えながら俺は会話を進めた。

「だって、中学・高校と8番レフトだったし。」

「そうじゃなくて！」

何が言いたいんだ？

「そうやって自分の能力がないと言っているから
本当は能力があるのに損してるんじゃないの？ってこと！」

「・・・・・・・・」

ふう～ん・・・そうは思えないけどな～
俺に特別な能力があるのなら教えてもらいたいものだ。

・・・あ。だからかなめは経営者やれって言うのか。
う～・・・ん・・・

そうは思えないんだけどな。

「でもさ、かなめ。」

「キミは”でも”とか”だって”ってすぐに言うね～」

「だって・・・」

「ほら！」

「ぬぐぐぐぐ・・・」

何も言い返せん。
でも、”でも”と思うのだから仕方がない。

”でも”とか”だって”と言えなくなったら話が切り出せないぞ。
困ったな～・・・

「ま。いいや。”でも”？」

俺に話すチャンスができた。

俺は自分が言いたいことを言えるようになったと
喜んでいたら、かなめも俺の話を聞くように配慮しているらしい。

「俺、8番レフトも悪くないと思っているんだ。」

「そうやってまた自分を悪く言う！
人間は自分の考えの外の話をされて受け切れないと
そうやって自分の殻に閉じこもるんだよ。キミは・・・」

「そうじゃなくて！！」

またタラタラとかなめの説教が始まりそうなので、
かなめの話をさえぎった。

俺の言いたいことはそんなことじゃない。

「俺から言わせればかなめのそうやって人を決めるけるのは悪い癖だ！」

「じゃーボクが言っていることが違うのならなんなのさー？」

かなめは口を尖らせて言った。
かなめは神様のくせに怒る。

山の神の怒りで噴火すると昔話で想像していたが、
家の神様のかなめの怒りでは特に何も起こらないのはありがたいことだ。

かなめの話では神様は大らかなので
噴火させて人間を困らせることはしないそうだが、
相手がかなめと考えると火傷ぐらいはするんじゃないかと俺は思っている。

とりあえず、今回は怒らず話を聞く姿勢なのありがたい。

「かなめもさっき言ってたけどさ、
友達が俺をよく言ってくれたじゃない？
” 元気付けられる ” とか。」

「・・・うん。」

ここは素直にかなめは頷いた。よしよし。

「その時の俺って8番レフトなんだよ。エースで4番じゃないんだよ。
でもいろんな人に何らかの影響を与えてきたらしい。
良く思われていたらしい。自分ではわからないけどね。」

今の仕事でも俺は気づかなかったけれど、
かなめがさっき俺を褒めてくれた。
だけどみんなの中で俺はエースで4番じゃないと思う。
もっと偉い人も、もっとすごい人もいるからね。

8番レフトでも十分俺を認めてくれている。
すごくありがたいって思ったんだ。

かなめが来る前から俺は8番レフトの人生だった。

かなめが来てから8番レフトの人生もいいものだって気づいたよ。
すごく感謝している。

8番レフトでも楽しい人生は送れる。
8番レフトって位置だからできることもあるんじゃないか。
って思うんだ。」

うん！上出来だ！

自分でもいい演説だったと思う。
うまく自分の思っていることを伝えられた。

これが俺の想いだけれど、かなめはどう思うかな？

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・好きにしたら・・・・・・・・」

なんだかしおらしい反応が返ってきた。
何を思っているかはわからないが、
どうやら怒っているわけではなさそうだ。

否定されないことにほっとする俺。

「俺さ、今まで8番レフトってすげー嫌だった。
もっと華やかな人生送りたいって思ってた。

でも今の人生も悪くないって思ったらちょっと良い気分になったよ。
もうちょっと8番レフトでチャレンジしたいな。
何をチャレンジするかってわからないけどさ。
エースで4番じゃなくてもいい気がするんだ。」

かなめの表情からは俺の考えが良いと思ったか
悪いと思ったかはわからなかった。

でも、かなめがきちんと俺の話をきいて
何かを感じ取ってくれたことは間違いないだろう。

「ありがとう。俺は俺の好きなように生きるよ。」

「・・・・・・・・」

かなめは何も言わないが反論はしない。
かなめから了承をもらえた気がして、すごく嬉しかった。

何をどうすればいいかわからないが、
なんとなく俺の気持ちは晴れやかだった。

■第9話『楽しい毎日』

「じゃ、その調子でがんばってね。」

「はい！」

ふ～なんだか楽しいな～

俺が警備している駐車場は4人で警備をしている。
俺ともう一人は常にこの駐車場で警備をしているが、
他の2人の警備員は日によって違う人が来る。

新人が来たり、問題児がきたり、ベテランが来たり、
誰が来るかはわからない。

最近新人の女の子が来た。まだ学生らしい。
女性で、しかも若い人は珍しい。

普段おじさん連中を相手にしている俺にとっては
同じぐらいの年の若い人と少し話をするだけですごく楽しいのに
若くてかわいいからまた楽しさも倍増だ。

女性で新人と言うと警備の依頼主から大丈夫か？と思われる。
だからしっかりと指導するように会社から言われる。

今日は俺が駐車場警備の現場を預かる責任者になっているから
ちょこちょこ様子を見に行っている。
今も様子を見ながらちょっとした会話を楽しんできた。

人の話を素直に聞くととても良い子だ。
あんまり出会いがない俺にとっては食事にも誘えたらなと思っている。

いかんいかん！仕事中に不謹慎な！
とは思うこともあるけれど、楽しんで仕事をする分にはいいだろう。
仕事は楽しくなくっちゃね！

この子がこの駐車場に来るようになってから
かなめは俺の仕事についてこなくなった。

「おなかが痛い」
「今日は一人になりたい」
「今人生に迷っている」

毎回よくわからない言い訳だ。

言いたくないのならいいと、
最近は理由もきいていない。

神様にもいろいろ事情があるのだろう。

かなめのことは嫌いじゃない。
けれど一日中一緒にいるのは息がつまるから
ちょうどいいと思っている。

今は何もかもが順調だ、そんな風に思える。

かなめ。

神様見習いと言うとても不思議なやつ。
あいつが来てから何かが変わったのだろうか？

トラブルを持ってきたような気もする。
あいつのせいで一時期俺は壊れかけ、
その後調子を元に戻して今に至る。

確かに今の俺はかなめが来る以前と比べて調子がいいかもしれない。
でも、かなめがいなくても今の調子になったんじゃないかと思う。

あいつは何のためにここに来たのだろうか？
そして、いつまで俺の家にいるのだろうか？

かなめがいないと生きていけないとは思っていない。
何か恩恵を受けているとも思えない。
でもかなめが家にいることが当たり前になっている。

いつかいなくなるんじゃないかと思うと、寂しくなる。

あいつは俺を幸せにするためにいるはずだ。
俺は今とても幸せだ。
だからと言ってかなめのおかげですごく幸せになったわけじゃない。

まだあいつはしばらくここにいるのだろう。

食費を負担するのはちょっと痛いけど、
ま、いいか。
大きな幸せが来るまで待とう。

■第10話『かなめの課題とは？』

今日かなめは家に一人でいる。
最近タカユキの仕事にはついて行っていない。

タカユキの職場にいる女にはあまり近づきたくなかったし、
一人で考えたいことがあったからだ。

かなめはずっと考えていた。
自分がタカユキの元に降りてきた理由を・・・

ボクはなぜここにいるんだろう？
タカユキくんを幸せにするためだと思うけど・・・

でも、タカユキくんはボクなんかいない方が良い気がする。
自分で自分の幸せを見つけて、自分の人生を生きている。

これはボクが導くべきものだと思っていた。
なのにタカユキくんは自分で見つけてしまったのだ。

タカユキくんの顔を見ればわかる。
今本当に幸せで楽しいんだ。
難しいことを考えたり、無理に何かを変えないでも、
このままずっと幸せでいられるだろう。

じゃあボクはなんなんだ？
何のために現れたんだ？

そもそも神様って何だ？
人を幸せに導くべき存在じゃないのか？

ボクはタカユキくんを幸せへ導けなかった。
ボクが幸せにしようとすることで、
タカユキくんの幸せを逆に妨害してしまった。

妨害したからこそタカユキくんは今の幸せに気づいたかもしれない。
結果的にはボクがいたからこそ幸せになったとも言える。

でもそんなものなのか？

ボクの存在、神様の存在ってそんなものなのか？
妨害して気づかせることが使命なのか？

いつも同じような考えになってつまづくが、答えはでない。
ボクはタカユキくんのために何が出来るのだろうか？
ボクに与えられた課題なんてなんだろう？

・・・・あ～！も～！面倒くさいっ！疲れた～

最近ずーっと考えてたからな。
考えるのもちょっと止めにしようかな。

かなめはタカユキが用意してくれたケーキが冷蔵庫にあるのを思い出した。

うん！大好きなケーキでも食べて頭をリラックスさせよう！

冷蔵庫のケーキを手でつかんで、皿もフォークも用意せず、
ほおばりながらかなめは愚痴を言い始めた。

そもそもさ～神様なんてなんでいるのさ？

人の願いを叶えられるわけじゃないし！
人の幸せを妨害して幸せになったら「よかったね！」
って結果論でなんかインチキじゃないか？
いつもいつも人の幸せを妨害するのは楽しくないし！

人の幸せを妨害するなんて迷惑だね。
いない方がいいでしょ。
神様でも何でもないじゃない。

全く・・・

一人で愚痴を言いながらもぺろりとケーキを食べてしまったかなめ。
ケーキを食べて落ち着いたのか一息ついた。

ふ～っ・・・

大の字に寝転がって天井を見ながらなにげなくつぶやいた。

多分タカユキくんならボクがいなくても
自分で自分の幸せを見つけられたと思うんだよね～

．．．．？？

なにげなくつぶやいた言葉だったが．．．

ボクがいなくても．．．

ボクが．．．．

．．．．．いなくても．．．．？

そうか！！

かなめは自分の体が熱くなるのを感じた。

しまった！

こうしちゃいられない！！

かなめは瞬時に家を飛び出した。

■第11話『新たな一步』

「お疲れ様でした～お先に失礼します！」

今日の仕事を終えて、早々と身支度をして俺は更衣室を出た。
俺の家はここから近いから歩いて帰れる。

みんなは電車だから早く着替えても
電車待ちのため早く帰れるわけじゃない。

だらだらと更衣室にいるのも嫌だから
俺は一人で早々帰ることにしている。

今日も無事に仕事が終わったことに安心しながら帰ろうとしたら、
従業員専用出入り口にかなめがいた。

「あれ？どうしたんだかなめ？俺を迎えに来たのか？」

・・・ん？

なんかこの光景に違和感を感じる。
かなめはいつも外にはいない。
俺の家の中だけ。

外にいるときはいつも俺の携帯ストラップだったな。
なんでそんなことしてたんだろう・・・

！！

「かなめは家の神様だから家を出られないんじゃないのか！」

手で俺を制止する素振りを見せながらかなめは言った。

「とにかくボクの話聞いて。もう時間がないんだ。ほら・・・」

かなめが目で下を見ろと合図する。

！？

かなめの足が透明になって消えかかっている。
ドラマや映画で幽霊が天国へ行ってしまうシーンのようだ。

「時間がないから手短に言うよ。ボクは課題がわかった。
そしてもうクリアなんだ。だからもう神様学校へ帰るよ。」

かなめの足が消えかかっていることに俺は混乱していたが、
今かなめが話していることが重要だということに気づき、
右耳から左耳へ出て行った話を捕まえて、内容を理解する。

「帰るって・・・そんなすぐにじゃなくても！」

「ダメなんだ。ボクは遊びで来ているわけじゃない。
自分の意志で来ているわけでもない。
課題をクリアしたら終わりなんだよ。神様が見てる。」

「そんな！お別れぐらい言わせてくれたっていいじゃないか！
神様ってそんな意地悪なのかよ！」

「だから今お別れを言っているじゃない。」

「そうじゃなくて・・・」

(神様って何でいつもこう急なの？)
(神様って何で突拍子もないの？)
(神様って何で頭が固いの？)

混乱している頭では神様への不満しか出てこない。

俺が考えたいことはこんなことじゃないのに！！

「神様も忙しいのだよ。言いたいことはあるだろうけどさ。
まだ胴体と顔が残ってる。話せる時間があるだけありがたいよ。」

苦笑いするかなめの表情から、
かなめも急な別れを望んでいないことがわかった。
しかし、かなめはそれを受け入れる強さがあるのだと感じた。

最後になってだけれど、初めてかなめがすごいやつに見えた。
やっぱり神様なんだね。

「あ～そうそう。タカユキくんに良いニュースがあるよ。」

こんなときに何のニュースだ？
ニュースなんて話している場合じゃないだろ？

かなめのニュースはロクなことがない。
どうせたいしたことがない話だ。

近くにケーキ屋さんを見つけたとか、
面白いおじさんが歩いているとか
おばあさんが犬をかついでたとかそんなことだ。

こんなときに何を言うんだか・・・

「実はね、神様見習いが課題をクリアすると、
課題クリアに関わった人は一つだけ願い事をすることが出来るの。
タカユキくんの願いが叶うよ！

ボクはタカユキくんを幸せにすることは出来なかったけれど、
最後にちょっとだけお手伝いができて嬉しいよ。
タカユキくんが自分で願いを持って、自分で幸せになってね！」

願い？

そうだ！

かなめの課題とはなんだったのだ？
かなめの課題は俺を幸せにすることだったはずだ。

俺は幸せになってない。なのになんで課題クリアなんだ。
おかしいじゃないか！

俺の表情から見て取ったのか、かなめは笑った。
かなめはもう顔だけになっている・・・

「ボクの課題はね。タカユキくんを幸せにすることじゃなかったんだよ。
ボクの課題は『見守る』こと。

神様はね、ずっと見守っている。
その人が幸せになると信じて見守っているのだよ。
それがわかることが今回の課題だったみたい。」

かなめの顔は半分になった。

「ずっと、見守っているから。大丈夫。
神様学校に行っても、見ているからね～」

そしてかなめは・・・いなくなった・・・

かなめがいなくなっても平気さ。
元々かなめはいなかったんだし。

お世話になったなんて思っていないさ。
「大丈夫」なんて言われたくはないよ。

最後まで変なヤツだったな～

かなめがいた辺りをぼんやりと見つめていると、
後ろから人の気配が湧いた。

ビクッ！

驚いて後ろを見ると最近うちの現場に来ている、
新人の若い学生の女の子、田村あみさんだった。

かなめとのやり取りを見られていたとしたらまずいなと思い、
話をはぐらかそうとした。

「あ～・・・え～っと・・・」

何か言わなきゃ！何か言わなきゃ！

「あ～・・・これから食事でもどう？」

「え・・・はい。いいですよ。」

・・・こうして俺は「食事にでも誘えたらな」という願いは達成された。

そして、俺はかなめに会うことは二度となかった。

■第12話『ありがとう、神様』

私とかなめの思い出。

とても大切な思い出なのに、
どうして私はこんな大切なことを忘れていたのだろうか？

当時はわからなかったが、
かなめからたくさんのものをもらった。

かなめのおかげで私は自分が言いたいことを言えるようになった。
感情を表に出すことができるようになった。

自分の人生が幸せだと気づけたじゃないか。
8番レフトの人生を愛することができたじゃないか。
自分が楽しく生きることを選択できたんじゃないか。

かなめのおかげで嫁に会えたんじゃないか！

たくさんの大切なことをかなめは教えてくれた。
かなめは私を幸せに出来ないと言ったけど、
私は十分幸せにしてもらった。

なのに、不思議とかなめがいなくなったその瞬間から、
私はかなめのことを思い出すことはなかった。

嫁のお腹に子供がいることがわかったとき、
気が早いけれど名前を考えようとした。

その時「かなめ」とすぐに浮かんだ。
女の子でも男の子でも使える名前だ。
何故浮かんだのかはわからない。

こんな安直な理由で名前を決めたら子供に失礼かなと嫁に笑いながら話した。
すると、嫁は涙を流した。

自分でも理由はわからないらしいが、とても良い名前だと言った。
私達夫婦にとって関わりの深い名前なのだろうか？

私今、会社員をしている。
スーパーの駐車場警備員をやっていた私は、
スーパーのパートのおばさんに気に入られていた。

ある日パートのおばさんに「こういう仕事をしてみないか？」
と言われて始めたのが今の仕事だ。

たまたまおばさんの知人が若くて真面目な人を探していて、
私だったらいいんじゃないかと推薦してくれた。

営業なんてやったことはなかったが、
先輩社員についてなんとなく覚えた。

気づいたらチーム長になっていた。
別に営業の成績が良いわけではないのだが、
チームをまとめて元気付けるのがうまいという上司からの評価で決まった。

実際そうなのかチームはうまくまとまっていて、
コンスタントに良い成績を残している。

そう言えばかなめがいたときに人を元気付けるのがうまいとか言われた。
才能に意識したことはないが、
自分の能力が発揮されているのなら嬉しく思う。

かなめのおかげで食事に誘えた女性とうまくいって、
結婚して、子供が出来た。今子供は私の横で寝ている。

この子には予定通り「かなめ」と名づけた。
良い子に育つといいな～

神様見習いのかなめは神様になったかな？
あいつも良くなっているといいな。

横で眠っている我が子を見る。
あいつのおかげでこの子が生まれたんだもんな。

感謝し・・・・

な・・・・

．．．．．あ．．．．．

私はあることを思い出した。

かなめと別れるとき、かなめは言った。

『タカユキくんの願いが叶うよ！』

その後嫁を食事に誘えた。
それが叶った願いなのだと思っていた。

でも、私はあの瞬間、食事に誘うことなんて考えていなかった。
私があの時考えていたのは

「かなめと一緒にいること」だった。

なんだかんだで、とてもさびしい気持ちだった。
せっかく何でも話せる親友ができたのに、いなくなるなんて．．．
そう思っていた。

それが．．．今叶ったと言うのか？

この子はあいつの生まれ変わった姿なのか！？

ヒュウウウウ～～～～

外からの強い風が窓から入ってくる。
強くて生暖かい風。

風は部屋にあるものを吹き飛ばさず、心地よく入ってきた。

子供を見ると、何が楽しいのかわからないが楽しそうに眠っている。

．．．．．

まさか．．．ね。
考えすぎか。

子供はみんな神様からもらったものだ。
アイツが神様になって、私達にくれたのかもしれない。

考えたってわかりやしないか．．．
でも、ありがとう。

お前のおかげで今私はすごく幸せだよ。

かなめの記憶はまた消えてしまうのかもしれない。

記憶がなくならないうちに書き記しておこう。
自分には大切な親友がいて、親友のおかげで幸せになれたこと。

いつか自分が書いたことさえも忘れてしまうかもしれないけれど．．．

今感謝しているのは本当だよ。

ありがとう。かなめ。

ありがとう、神様。

第3部

『神様が 降りてくる』

■第1話

『ボクは君に会いにきたんだ』

友達が死んだ。

1年ちょっと前の話だけれどね。

就職が決まって、大学の卒業して、会社の研修をしているとき。

いきなり死んだ。

『これからって時にね〜』

なんて言っている人はたくさんいて、

たくさんの人が悲しんだ。俺も悲しんだ。

1年経つと、悲しみも薄らいできて、

若くして旅立った友達がうらやましくなることがある。

いや、別に自殺願望とかあるわけじゃない。

入社2年目の会社員でそれなりにやっている。

特に困ったことはない。

でもそれだけの人生にたまに疑問を感じる。

特に楽しいことがあるわけじゃない。

特に何かしたいことがあるわけじゃない。

不況だなんだって景気の悪い話はたくさんあって、

将来を不安にさせたがるやつがたくさんいる。

そんなことはわかってるよ！

どうせ険しい顔しながら毎日せかせか働いて、

適当な女と結婚して、子供ができて、

お金に苦しんで、そのうち家から追い出されるようになって、

いつの間にかじーさんになって、

楽しいことなんて何にもなかったな〜って死んでいくんだ。

「どうせ」って言うような人生なら

早々命がなくなるのもいいんじゃないか？

生き生きとしている時に命がなくなったほうが幸せなんじゃないか？

年を重ねると面倒なことが増える。

そんなこと知らないほうが幸せじゃないか？

死後の世界があるとしたら、
俺はくそじじいの体で若い友達に会えるのかな？

友達は若い体なのに俺はくそじじで体の自由が利かないなんて悔しいな。
だったら俺も早々死んでみるのもいいんじゃないかな？

いろいろな考えが駆け巡るけれど、答えはない。
そもそも俺は死にたいわけじゃないから
考えを持っていったって死にやしない。

なに暗いこと考えるんだって自分に苦笑して
希望のない現実に戻る・・・

時々暗い考えになりながらもなんとか生きている日々。
そんなある日、中学の同窓会に行った。

おお～大きくなったな～！
なんておじいちゃんみたいなせりふを言いたくなるほど
変わったやつが多い。

俺は高校から私立の高校へ入った。
俺と同じ高校へ来るやつは誰もいなかった。

私立の高校は家から遠くて、
登下校の時間が中学時代の友達と合わなかった。

だから中学卒業してから一度も会ってないやつもいる。
中学卒業が15歳。俺が今23歳だから・・・8年ぶりか。

そりゃ～人も変わるよな。

仲の良かったやつらと楽しくワイワイ騒いで楽しく飲む。
なんだかんだでみんな楽しくやっているみたい。

そっと一人トイレに立つ。

・・・

トイレはとても静かだった。

つい1分前まで友達と楽しく話していたのが嘘のよう。
酔いが冷めるほどじゃないけれど、気持ちは落ち着いてくる。

今日が終わって、なんとなく明日が終わったら会社か・・・
日常に戻って、くだらない日々を送るのか・・・

中学校のときは楽しかったな。
毎日キラキラしていて、可能性に満ち溢れていて・・・

何十年もつまらないことをやらなきゃいけないなんて、
考えなかったな・・・

はっ！

イカンイカン！
今は楽しい時間だ！

悩みなんて忘れちまえ！

暗い考えになりそうな自分を慌てて抑えて、
俺はトイレを出た。

「長澤くん！」

トイレから戻ると俺を呼ぶ声がした。
声の方を見てみると・・・

あ〜っと・・・あ・・・

「かなめ！」

俺を呼んだ相手はにっこりと頷いた。

こいつは・・・え〜っと・・・
うん！とりあえず「かなめ」って呼ばれてた。
だからかなめでいいや。

本名は知らん！大丈夫だ。

飲み会なんてそんなもんだ。

小柄でまだ幼さの残る顔の少年・・・
って俺と同じ年だから少年じゃないんだよな（汗）
少年のような顔をしたヤツ。

隣が空いているようだからどっかりと座敷に腰を下ろした。
にっこりと微笑みかけてくる。

かなめは手にオレンジジュースを持っている。
酒が飲めないのかな？
ま～いいや。俺もちょっと酔ってるからオレンジジュースに付き合おう。

空いてるグラスにオレンジジュースを手酌して、軽くグラスで乾杯。

ジュースを一気に飲み干したところで・・・

「久しぶりだな～、最近どうよ？」
お決まりのパターンだ。

中学卒業してあ～だこ～だって話を聞いても仕方ない。
そんな話を互いにしてたら夜が明ける。
過去の栄光の話はいいから今に生きることが大事だ！
うん！だから今の話でいいのだ。

どうせ不況だとか、上司の愚痴を言うだけだ。
そいでオレンジジュース飲んで、明日には全部出して、
明後日の月曜日にはきれいさっぱり入社するのだ。

う～ん、お決まりだけれど素晴らしいプランだな～
なんて考えていたとき、かなめは妙なことを言った。

「世の中ってさ～楽しいことだらけなんだよね。
まだ知らない楽しいことってたくさんあると思う。
だからさ、死ぬって一秒でも考えたらもったいなくないかな～」

ドキッ！！

自分の心を見透かされたようで俺の心臓はすさまじい速さで動いている。

なんだよ・・・それ。

俺の最近の考えていることへの答えか？

なんでコイツがそんなこと知ってるんだ？

なに？なんなの？どういうこと？

はげ？

いや。はげてねーし！

頭の中がパニックになってわけのわからないこと考える俺。
かなめの顔を見ると俺の方を見ながら微笑みながら言った。

「ボクは君に会いに来たんだ。」

．．．

長澤タカオ 22 歳独身。
これから少し奇妙な体験をすることになるのであった。

■第2話『アイツは何者？』

『ボクは君に会いに来たんだ。』

普段こんなことを言われたら警戒する。
女に言われたらちょっと嬉しいけれど・・・でもヘンだ！
男が言うのだから余計気味悪い。

調子のいいやつならそんなこと言うかもしれないけれど
そんなキャラじゃない。そもそも冗談を言うような調子で言っていない。

「どういうことだよ？

『楽しいことだらけ』って。『俺に会いに来た』って」

混乱していたが、なるべく平静を装って強い口調で言ってみた。

別に強い口調で言う必要はなかったのだが、
自分が混乱していることを悟られたくなかったし、
相手にスキを見せまいと俺は身構えていた。

「え・・・あ・・・なんていうか・・・言ったとおりで・・・
楽しいことばかりだし・・・会いたかったし・・・」

「だからなんでなんだよ！！」

なんだか話が噛み合っていない。
かなめも少し戸惑っているように見える。

なんか俺おかしいこと言ったか？

俺の考えていることの答えのようなことをコイツは言った。
それはなんでだ？
俺の心でも読んだのか？

それに、中学を卒業して10年ぐらい経つ。
俺たちは別に仲良しってわけじゃなかった。

それが今になってなんでいきなり会いたくなったんだ？
おかしくない。当然の疑問だ。
なんでコイツはわからないんだ？

俺の苛立つのがわかったのか、かなめは説明を試み始めた。

「えっと・・・『最近どうよ?』って言ったでしょ?」

「うん。」

「で・・・最近楽しいことだらけだな～と思ったから答えて・・・」

「ん? う・・・うん。」

「で・・・長澤くんに会いたいな～となんとなく思ったから
『会いに来た』って言ったんだけど・・・なんだかおかしいかな?」

「え?なんで俺に会いたいと思ったの?つながらないんだけど。」

「なんでって言われても・・・なんとなく。
なんかこ～無性にバナナが食べたくなくなったりしない?そんな感じ～」

「ん・・・う・・・うん・・・」

俺は・・・何を期待していたのだろう。

俺はかなめのこの答えに明らかにがっかりしていた。
何故自分がこんなにがっかりしていたのかはわからない。

目の前にいる男は俺の同級生だ。ただの人間だ。
超能力者でもなんでもない。

俺の考えていることがわかるはずがない。
俺を助けに来た神様じゃない。

そんなの当たり前だ。
なのになぜ俺は大きな勘違いをしたのだろう。
心のどこかで誰かが自分を助けてくれるんじゃないかって
期待していたのだろうか?

俺ってそんなに人に頼っていたのかな?

俺の「死んでもいいんじゃないかな?」病は思ったより重症かな、こりゃ。

「どうかしたの?」

不思議そうな顔で訊くかなめの言葉に我に返る。

歯切れの悪い返事をしてから黙ってたから気になったのかな。

「ん・・・なんでもない。悪い！」

一人で期待して苛立っていた自分がちょっと恥ずかしかった。
アホみたいな考えだったし。

そんな俺の考えもかなめはわからないだろうが、
何も言わず、ほほえんだ。

「笑っている」でも「笑顔」でもなくて、
「ほほえみ」がすごく適切な表現とを感じる顔だった。
顔というか、雰囲気というか・・・

ん～なんというかな。そうだな。「温かい」のだ。
お母さんが子供を安心させるためにほほえんでいるような感覚かな。
ま～目の前のかなめは男で同い年だけれど（汗）

言葉の意味自体はそんなに重要じゃない。大切なのは心。
今かなめは俺を助けようとしてくれている。理解しようとしてくれている。
そんな感覚だ。

とても不思議な気持ちになった。
今まで自分がいた空間から別の空間に入ったような妙な感覚があった。

そんな感覚を持っている自分にはっとする。

俺はこの不思議な微笑みを感じているからこそ、
こいつに何かを期待したんじゃないだろうか？

・・・

楽しく同窓会を終えて家に着いた。

みんな変わったな～なんて思いながら
中学校の卒業アルバムをしてみる。

同窓会に来ていたやつの顔を照らし合わせると
昔はこんなにかわかったのにな～
何であんなに太っちゃったんだろ？
随分端正な顔になったな～
いろんなやつがいて面白かった。

高校生は成長期だ。中学を卒業してから顔や背が変わってもおかしくない。

結構面白いものだな～とアルバムをめくっていると・・・

あれ？

いない・・・

不思議な雰囲気を持つ男。
かなめの名前は卒業アルバムにはなかった。

■第3話『かなめの正体』

一体どういうことだろう？

俺の目の前に現れたあいつはなんだったんだ？

こういうのでよくある展開としては・・・幽霊・・・だな。

幽霊？あんな堂々と居酒屋に？

夜ではあったけれど・・・うーむ・・・

すると・・・あれだな。

詐欺師だな。オレオレ詐欺の新しいバージョンか？

いやいやストーカーかもしれん。

「俺に会いに来た」とか言ってたし！

・・・で、ストーカーってどう対処すればいいんだ？

月曜日の朝、そんなことを考えながら歩いていた。

ウチから最寄り駅まで徒歩15分、ずっと考えていた。

考えたのは今日の朝だけじゃない。

昨日もずっと考えていた。

「かなめ」という名前は男でも女でもいる。

もしかしたら性転換でもしたのかと女子の名前も

見てみたが「かなめ」と言う名前は一人もいなかった。

結局、結論は「本人にきいてみないとわからない」だ。

それはそうだ。自分の頭の中だけですべて片付くなら

そんなに苦労はしないだろう。

頭の中だけで片付かないから面白いこともある。

だから人は外の世界に出るしかないのだ。

田舎者は都会に憧れるのだ。

そうして人は成長するのだ！

・・・と、暴走的な思考が一旦終わったところで

また何度も同じことを考えてしまうのだ。

はっきりとした答えがでないことがとても気持ち悪い。

昨日も同じ思考を繰り返していたのに
今日もまた同じことを考えるためにせわしなく頭を働かせている。
もっといいことに俺の頭は使えないのかね～なんて思っていたら駅に着いた。

駅に着いていつも通り改札を抜けて、いつも通りの車両に乗るところで・・・

幽霊に会った。

いや、詐欺師かもしれん。
いいや、ストーカーかもしれん。

とにかく、いろんな容疑がかかっている「かなめ」に会った。
何故か駅のホームに「かなめ」がいるではないか！

「おはよう！」

「おはよう。ちょうどよかった俺はお前に話があったんだ。」

「なに？」

近寄って足を見ると、ちゃんとある。
手を引っ張って話しやすいところへ連れて行く。

きちんと実体があって手もつかめる。
ということは幽霊じゃないらしい。
幽霊じゃないことにほっとした。

この年になっても未知なるモノは怖いものだ。
とりあえず人間なら俺にも勝ち目はある！

「っと・・・卒業アルバム見たんだけどさ。
お前の写真がなかったんだけど・・・どういうこと？」

ちょっと言いづらい言葉を緊張しながら目線を下げて言う。

俺は間違ったことは何も言っていない。
訊いてみなければわからない。
コイツの正体を暴いてやる！！

ドクン・・・ドクン・・・ドクン・・・

朝の駅のホームは人がたくさんいて、忙しく時間が過ぎている。
でも、自分だけ時の流れが遅く動いているように感じる。
かなめはどんな顔をしているだろうか？

ここは駅だ。相手が奇行に出ても俺は安全だ。

なんたって善良な市民だからな！ うん！
自分に言い聞かせながら勇気を出して少しずつ視線を上げていく・・・

(お前は一体・・・何者なんだ！？)

視線が合う前にかなめが答えた。

「あー・・・やっぱり覚えてなかったか。」

緊張している俺とは裏腹に、緊迫感のないかなめの声が耳に入る。

「ボク中学校3年生の夏休みで引っ越したの。
卒業は別の中学してしたんだ。
だから卒業アルバムには出てないと思うよ。」

視線を上げた俺と目が合うとかなめはバツが悪そうに笑う。

■第4話『本当？』

かなめの正体を幽霊だのストーカーだの詐欺師だの
考えていた自分がアホみたいだ。

申し訳ない気持ちになって、かなめに一緒に飲もうと誘った。
二つ返事でOKが出て、夜に一緒に飲むことになった。

とは言っても昔話に花を咲かせるわけではない。
別に同窓会で意気投合して話をしたいわけじゃなくて
俺の中ではお詫びのようなものなのだ。

だから特に話すことがない。

かなめは酒を飲まずにオレンジジュースを飲みながら
ニコニコしているだけ。
俺が話すのを待っているのかな？

かなめは自分を主張するタイプじゃないから俺が話したほうがいいだろう。
そんな風に思って、自分のことをいろいろと話した。

大学を卒業して、会社に就職した。

営業社員として採られたのだけれど、
いきなり人事課に欠員ができて、人事課に配属になった。

営業は出張が多くて、休みも少ない。
そんなこと会社の研修で初めて知った。

研修のときに「出張が嫌な人はいる？」と言われて
ほいっと手を上げたのは俺だけだった。
そんな単純な理由から俺は人事課・・・というか内勤に配属が決まった。

人事課って言っても別に面接はしない。
入社1年目や2年目の社員に任せられる仕事なんてほとんどないのだ。
いろいろと重要なことは上司がやることになっている。
俺の仕事は書類の整理だとか、
倉庫の整理だとか、掃除だとか、
他の内勤の部署の簡単な手伝いだ。

いつもむすっとした顔のおじさん達に囲まれて、
楽しいことなんて全くない。

むすっとした顔のおじさん達がみんな部長やら課長やら何やらの肩書きを持っているからまた厄介なのだ。

息が詰まるというか苦しくて仕方がない。
あの雰囲気によければなかなかいい会社だ。

それなりの給料はもらっているし、
内勤で残業はほとんどないし。

俺の友達は22歳と言う若さで死んでしまった。
人生これからって時に、だ。

それに比べたら俺は生きているんだからありがたい。
友達の分も生きなきゃいけない。

俺は生きているんだから幸せだ。
楽しいことがあろうがなかろうがいいんだ。

生きてれば幸せだ。
会社があって、仕事があるから幸せだ。

って言うような話をした。

かなめが聞き上手なのか、
俺にストレスがたまっていたのかはわからないけど、
俺の話はずーっと続いて、店が閉まるまで話してた。

5～6時間ぐらいかな？自分でもよくま～そんなにしゃべったと思う。
その間ニコニコしながら聞いているかなめも人がいいなと思う。

店を出て別れ際にかなめが言った。

「今日話した話は本当？」

かなめが何を言いたいかわからなかった。

本当に決まっているだろ！俺をうそつきだって言うのか！？
と声を荒げて言ったら、かなめは笑いながら「本当ならいいんだ。」
と言って帰っていった。

俺はぼ〜っと歩きながら家に帰った。

帰る途中『今日話した話は本当？』
というかなめの言葉が妙に気になって仕方なかった。

■第5話『本心』

夢を見た。

ストーリーは覚えていないけれど、
俺は泣いていた。そして怒ってもいた。

すごく辛くて、悲しくて、情けなくて、泣いていた。
泣くだけじゃ足りなくて怒っていた。
ものすごい声で怒鳴って、吠えていた。

『今日話した話は本当？』

夢が終わる直前に、かなめの言葉が思い出された。

(俺は・・・嘘をついていたのか？知らないところで・・・)

起きたばかりの、ぼ～とした頭でたいしたことは考えられないけれど、
自分が嘘をついていたと感じた。

感じたことだから言葉でうまく説明はできないけれど、
自分が言っていたことが本心ではないとはっきりわかった。
何故か今、はっきりわかったのだ。

かなめに話した内容は大半が本当だった。
でも、最後だけ違った。

今「自分が幸せ」ということ。
俺は別に・・・幸せなんて思っちゃいない。

そりゃ～五体満足に生まれて、平和な国に生まれたことは幸せだと思う。
でも、それは誰かと自分を比較して自分の人生は悪くないと言い聞かせただけ。
そう言うことが賢いと思っていたからそう言っただけ。

友達が死んだのはも本当だ。
でも、友達の分まで生きなきゃいけないって思っていない。
自分は生きているだけで幸せなんて思っていない。

会社があることも仕事があることも・・・

幸せと言うことが賢いと思っていた言っただけ。
幸せと言うことが誰かに褒められると思っていたから・・・

俺の本心じゃない。

俺は何がしたいんだろう？
なぜか模範解答を求めている。

良い子だと言われる答えをいつも探し求めて、
それを答えにしている。
自分の考えだとしている。

誰かに褒められたいのかな？
誰かから自分を守るためなのかな？

俺は今、幸せじゃない。仕事はつまらない。
会社も仕事もない方が幸せだと思うこともある。

仕事は忙しいわけではないけれど精神的に辛い。
プライベートは可もなく不可もなく、つまらない。

生きがいなんてまるで感じていない。
楽しいことなんてない。
いつ、この命がなくなっても困ることはない。

そう思っているのが俺だ。

こんなこと言えば話しが暗くなるし、
話したって仕方がない。
だから、誰にも言わなかった。

生きる気力がまるごとなくなってしまうようで、
誰にも認めてもらえなさそうで、
誰かに攻撃されそうで・・・
そんな自分を認めることも嫌だったのだろう。

本心の自分が嘘で、嘘の自分が本心だと思い込みたかった。
嘘の自分が本心である方が、賢い生き方で、幸せな生き方で、
誰かに褒められる生き方だと思っていたから。

・・・こんなことがわかったって何にも解決はしない。
自分の本心がわかったからって、幸せな気分になるわけじゃない。
自分の見たくない部分を見ただけで、嫌なことが増えただけ。

何も変わりはない。

朝の支度を終えて会社へ向かう。
何も変わりはない。

いきなり朝食がおいしくなるわけじゃない、
会社が休みになるわけじゃない、
給料がアップするわけでもない。

駅まで歩く道のりはいつも同じような人が歩いている。
何も変わりはない。

みんなスケジュール通り、
どこかに台本が書かれているかのように変わらない。

足取りが少し重い。

おかしいのは俺だけ。
台本どおりに動けない。
演じることができない。

はあ〜・・・嫌だな・・・

暗い気分で駅に着くと・・・

かなめがいた。

■第6話『電車』

「おはよ！」

「かなめの言った通りだったよ。俺、ウソつきだった。
俺が言ったことは全部嘘だった・・・」

かなめはにこやかにあいさつをしたが、
そのテンションで挨拶を返す気にはなれなかった。

自分のことで頭がいっぱいで、話さずにはいられなかった。

俺があいさつを返さず会話を始めたため異変に気づいたのか、
かなめは俺の次の言葉を待っている。

「昨日お前、俺が言ったことが本当か、って言っただろ？
考えてみたんだけどさ、全部ウソだったよ。
友達の分まで生きること、自分が幸せだってこと、
ぜ～んぶウソだったよ。」

「・・・・・・・・」

かなめは黙って俺の目を見ている。

なんだかじっと目を見られるのも嫌なので視線をそらし、線路を見た。
この線路を電車に乗ってまっすぐ行けば会社。

重い雰囲気の世界が待っている。

はあ～・・・嫌だな。こんな気分で会社か・・・

「会社・・・会社もウソで入ったようなものだったな。
俺さ、友達より早く就職が決まったの。
すんげ～優越感だった。
四苦八苦しているやつもいる中、涼しい顔してるんだもん。」

あれやこれや志望動機つけて面接受かって決まったんだ。
『私はこれがしたいから御社を志望しました』みたいなさ。
別にやりたいことなんてないのにさ、あるフリしてた。

そうするとさ、会社のウケもいいし、
友達もすげえって言うってくれるんだよね。
時には合同面接受けたヤツにまで『君はしっかりしてるから受かるよ』
なんて言われた。実際受かってさ。

自分が認めてもらえているようですごく嬉しかった。
でも・・・そのおかげでどんどん自分に気づかないところで
ウソつくようになって・・・
今じゃ生きることに希望もないよ。」

(はぁ～・・・なんでこんな人生になったんでしょ？
誰がこんなせいにしたんでしょ？
俺のせいか、俺が悪いのか・・・
やだな。こんな人生。やめたいよ。)

「長澤くん？」

「・・・ん？」

かなめはさっきと同じ目で俺を見ている。
見下すわけでもなく、哀れむわけでもなく、
ただ俺を見ている。とてもまっすぐな瞳で見ている。

「長澤くんはさ、なんでその話をボクにしてくれたのかな？」

「そりゃ～お前が本当か？って言ったからだろ？」

「うーん・・・そうなんだけど・・・ボクはまたウソだと思うな！」

「はぁ～？」

ニコッとしたかなめ。普通こんなときにニコッとした顔を見たら腹が立つ。
俺をばかにしてるのか！？って思う。
でもこのかなめの顔は違った。

面白いはずらを思いついた子供のような顔で、
なんだか楽しそうだった。

自分が暗い気分の時に、無理に明るく振舞うやつ、
励まそうと無理に前向きな言葉をかけるやつ、
いろんなやつがいると思う。

気遣ってくれるのはありがたいけれど、
それが本心じゃないのもわかるし、
前向きの方がいいことは俺もわかってる。

わかった上での考えで、
わかっているから辛いんだ。

だから変に気遣われるのは嫌だ。

もしかかなめが同じような態度だったら
俺はかなめの言葉を聞こうとしなかったと思う。

「長澤くんは何で今辛そうなの？」

「なんでって・・・
誰がこんな人生楽しく生きられるますか？って話だよ！」

「じゃあさ、最後に『生きることに希望もないよ』
って言ったけど違うんじゃない？」

「??」

「本当は楽しく生きたいのだけれど、
それができてないのが苦しいんじゃないかな？
心の奥底では楽しく生きたいのだけれど、
うまくいなくて困ってるんじゃないかな？」

自分では気づかないけれど、
何か変わると思ってボクに話してくれたんじゃないかな？」

「ん・・・・」

俺にはかなめが言っていることがなんだかよくわからなかった。
だって俺は”人生をやめたい男”なのだからそんなはずはない！

「俺は・・・生きることに希望もない男だよ。」

これは・・・本心なのか？
よくわからないけれど、口からは勝手に言葉が出てきた。

「ふ～ん。そうかな～？
ボクに助けて欲しくって話してくれたんじゃないかな～？
『辛いよ～辛いのをわかって～！俺を見てくれ～！』
って話してくれたんじゃないかな～？」

かなめは相変わらずいたずらっ子のように、楽しそうな顔をしている。
そして、俺の目をじっくり見ながら話す。

ん・・・

なんか・・・辛い。
かなめの目を見てられない。

かなめの言っていることはよくわからないけれど、何かを感じた。
かなめが言っていることは間違っていない気がした。

ほんの少しだけど・・・

「いい人でも悪いところがあるよ。10人ぐらい集まって、
その人の悪いところの話をい～っぱいしたらその人が悪い人に見えてくる。
多分今の長澤くんが自分に対してそれをやってるんじゃないかと思う。」

ん・・・そうなのか？

「悪いところばかり見ていれば悪い人になるし、
良いところばかり見ていれば良い人になる。それと同じ原理だよ。」

うーむ・・・

腕組みしながら考えている俺を見ながらかなめは笑った。

「あ、電車が来た！ほら、乗ろうよ！」

かなめとの話に夢中で気づかなかったがいつの間にか電車が来ていた。

俺は一瞬ためらってから・・・笑顔のかなめが呼ぶ方へ・・・

かなめに続いて一緒に電車に乗った。
そして、電車は進み始めた・・・

かなめの言っていることはよくわからない。
でも、悪い気分じゃない。
楽しく生きられるのならそれに越したことはない。

だったら楽しく生きる方法を考えよう！

難しく考えるより、単純でいいじゃないか。

会社の最寄り駅で電車を降りるときにかなめに言われた。
「いい顔になったよ！」って。

なんだかこの一言が、とても嬉しかった。

■第7話『虹』

「どうも～こんにちわ～」

大きな声でにこにこしながら中年の男性が会社に来た。
七村さんだ。

七村さんとは七村商店という事務用品店の店長さんだ。
・・・多分（汗）

うちの会社で色紙が足りないとか、ペンが足りないとか、
事務用品がなくなったときに発注する。それが七村商店なのだ。

ちなみに発注するのはウチの部署では俺。
数少ない俺の仕事の一つである。

七村商店に発注の電話をかける。

↓

会社に商品を持ってきてもらう。

↓

伝票にハンコを押す。

これが俺の仕事の一連の流れだ。
いつも電話をすると七村さん本人が出る。
いつも商品を持ってくるのは七村さん本人。

ということから個人で経営している
小さな事務用品店だと俺は勝手に思っている。

七村さんはいつも元気がよくてにこにこしている。

うちの会社がお客さんだからかな？
そうだとすると元気がよくてにこにこしている人と接するのは気分がいい。

親しみやすい雰囲気を持っているから話をしたくなるけれど、
うちの会社は私語厳禁。

厳しい上司の目が光っているから、
そんなに言葉を交わすことはできない。

だからなるべく笑顔で、明るく、
感謝と親しみを込めて対応しているつもり。

今日は別の部署で七村商店に発注をかけたらしく、俺の机の方にはこなかった。

数分後偶然俺がトイレに入ったら七村さんがいた。ちょうどトイレを出るところだったようだ。

「あ。どうも～こんにちわ～」

七村さんがやはり大きな声と笑顔で挨拶してくれた。声が響くトイレではちょっと大きすぎる声だけど・・・

「あ、七村さん。こんにちわ～」

いきなりの大きな声に驚いたため、俺はただ挨拶を返すだけしかできなかった。

「ははは。がんばってる？なんだか辛そうだけれどさ。がんばってね。ボクもがんばるから～フフフ・・・」

何故か笑いながら七村さんはトイレを出て行った。

「がんばってね。」会社で一度も言われたことがない言葉。

無理やり尻を叩くわけでもなくてすごく温かみのある言葉で、すごく嬉しかった。

七村さんは個人で会社をやっている人だ。一人で営業から何から全てやっているに違いない。俺より大変だと思う。

俺は会社員で、上司がいて、仕事の責任は上司の責任になる。給料も安定した給料がもらえる。仕事も末端のことだけだ。

でも七村さんは仕事で失敗したら全て自分の責任で、自分の生活に影響がでる。ご飯が食べられなくなるかもしれない。

個人経営者って大変なことだ。

そんな人が笑顔で俺を励ましてくれたんだ。俺も精一杯答えたいな。俺が元気だったら七村さんも元気でいられるに違いない。

誰に言われたわけでもなく、
こうしなきゃいけないと考えたわけでもなく、そう思えた。

(七村さん。確かにちょっと前までは辛い気分でした。
暗い顔してたかもしれません。でも今は大丈夫。
楽しく生きるって決めましたから。)

七村さんが出て行ったトイレのドアを見て、心の中でつぶやく。

トイレの窓から外が見える。

一瞬、虹が見えた気がした。

え？と思ってよく見ると虹はなかった。

気のせいだったのかな？

あ！

七村さんと話すチャンスだったのにな～
逃してしまった・・・

ま。またチャンスは来るでしょう。
何かあれば七村商店に電話するからね！

■第8話『かなめが笑った』

・・・何が起きているんだろう？

最近世の中がヘンだ。

いや。世の中と言うか会社がヘンだ。

仏頂面してた上司の機嫌がいい。

機嫌がいいというかなんか気さくに話しかけてくる。

親しみやすくなっている。それも毎日だ！

しかも直属の上司だけではない。周りの重役がみんなそんな感じだ。

この間は「がんばっているから」と、

社長にお昼ご飯をご馳走になった。

社長は女性社員何人かを連れて食事をすることはよくあるが、男性社員を食事に誘うことはめったにない。

何が起きているのだろうか？

この間七村さんに「がんばって」と言われた辺りだろうか？

あの辺りからおかしいような気がする。

「いや～すっきりした～！」

かなめがトイレから戻ってきた。

今俺はファミリーレストランでかなめと食事をしている。

かなめとは同窓会に出てからちょくちょく通勤のときに会う。

通勤のときに会うと、楽しく話しながら通勤する。

かなめと通勤するときは毎回楽しい。

そして、毎回のように地元で夜ご飯を食べようという話になる。

かなめは酒が飲めないからファミレスでゆっくり話をして、

夜11～12時になったら帰るというのがお決まりのパターンだ。

今日もその流れで食事をしている。

かなめがトイレで席を立ったとき、
ふと、少し前までの自分はこんな気持ちではなかった、
こんなに毎日笑っていなかった、と思った。

気持ちが冷めると「明日は会社か・・・」
なんて日常に戻る違和感を感じていた。

何で今は考えないのか？
と思うと会社でのストレスがなくなっているから。

で、会社の異変に気づいたのである。

いつから変わったのだろうか？
何故今まで気づかなかったのだろうか？
何故今頃気づいたのだろうか？

七村さんのおかげで会社が変わったのかと思った。
でももっと前に俺はかなめと会っている。
俺を楽しく生きる方向へ導いたのはかなめじゃないか？

あまりにも近くにいきすぎてわからなかった。
考えてみればかなめと同窓会で再会してから
まだ1ヶ月ぐらいしか経っていない。

なのにずっと昔から友人であるような感覚さえする。
中学校の同級生だから昔から友人であると言えるのだが・・・

もっと身近な、家族のような感覚がする。

そういえばかなめと再会したとき、妙な感覚があった。
どんな感覚だったかな～？思い出せない。
ちょっと変わった雰囲気だったことは覚えてるのだが・・・

「どうしたの？なんか考え事？」

つい癖が出て考え込んでしまった。
黙ってどこか一点でも見つめて考えていたのだろうか。

「あ。いや・・・なんかさ。よく考えてみると最近いいことがあってさ。
それってかなめのおかげなのかな～って思ってた。」

素直に今思っていたことを口に出してみる。

「いいことってどんなこと？」

首をかしげるかなめに会社の上司や社長の変化、
七村さんの話をしてみた。

．．．．

「おお！それはすごい！！奇跡だね！」

かなめは喜んでくれているようだ。なんかちょっと嬉しい。

でも．．．

「いや！奇跡ではない！」

「？」

「俺の実力だ！奇跡とかバカにするな！

奇跡だとしても、かなめのおかげだとしても、それを起こしたのは俺だ！

と言うわけで俺の実力だ！

そのうち奇跡じゃなくて『当たり前』になるのだ！」

「．．．．．．．」

キョトンとした顔をしてかなめは黙っている。

あれ？なんかまずいこと言ったかな？

冗談なんだけどな～．．．

あれれ？？？

「あははははははは！！！」

突然かなめが笑い出した。

さっきの間は何？これは演技？

．．．にしては長いこと笑ってるな～

ツボにでも入ったのかな？

よくわからんツボだな～

「ははははは・・・そうだね！そうだね！
いや～長澤くん！君は面白いよ～はははははは・・・」

「何？バカにしてんの？」

「いやいや・・・ボクはね。
いいことがあったら感謝するものだと思ってたの。
自分の力じゃなくて、いろんな人のおかげと思うものだと考えてたの。
でも自分の力もあるんだよね～うん！

自分の力って考えはボクにはなかったものだからさ。
すごく嬉しいんだよ。すごく楽しいの。ありがとう！」

言っていることはよくわからないが
かなめは目をキラキラ輝かせて楽しそうに話している。
バカにしているのではなさそうだ。

「そうだ！お前は俺からどんどん学べよ！感謝しろよ！」

「うん、わかった。ありがとう！
長澤くんの前に現れた意味がわかったような気がするよ。」

「は？」

「ま～気にしないで！」

そ一言えばかなめと再会したとき、
『俺に会いたいと思っていた』と言っていたな。

なんとなく思っただけでどうしてかはわからないと言っていた。
その辺のことを言いたかったのかな。

そんなこんなで今日も12時ぐらいにかなめと分かれた。

思えばかなめがこんな風に笑ったのって初めて見たかもしれない。
俺はかなめのおかげで毎日が楽しくなり始めている。

もっとかなめを笑わせたいな・・・

・・・ってアイツは俺の彼女か！？

自分で自分につっこみながら思いながら帰っていった。

■第9話

『すべては自分が作っている』

「かなめに会ってから世の中が変わったよ！
すごく楽しい世の中になった。ありがとう。」

今日もかなめとファミレスでご飯を食べながら楽しく話している。

生きることに楽しみを感じていなかった俺だが、
少しずつ世の中が楽しいと感じるようになった。
何故か会社の雰囲気良くなった。

理由はわからないけれど、かなめと出会ってからのような気がする。
だからなんとなくお礼を言ってみた。

「ありがとう・・・でも、ボクは何にもしてないよ。」

かなめは微笑みながら言った。

「え？でも・・・ま、気にするな。俺の気持ちだ！」

笑いながらご飯を食べる。

確かにかなめが具体的に何かをしてくれたわけではない。

俺の会社に来て「長澤タカオをよろしくおねがいしまーす！」
なんて言ったわけじゃないし、俺の良い噂を流したわけでもない。

あれ？なんで俺、こいつに感謝してるんだろ？

なんだかよくわからなかった。

「人は自分が目を向けたものに集中する。
楽しくないと思えば楽しくないことに集中する。
楽しくないと思っているから楽しいことが起こると、
自分の考えが否定されるような気がして、
一生懸命楽しくない世の中にしようとする。

でも楽しいと思えば楽しい世の中になる。」

いきなりかなめが言い出した。

何の話だ？

「う～ん・・・そんなもんかね～」

よくはわからなかったが、
言っていることは間違っていない気がしたから
一応返事をしてみた。

何でこのタイミングでこんな話をするんだ？

「そんなもんだよ。だからね、すべては自分が作っているの」

「????」

「AさんがBさんに敵対心を持っていたとする。
仕事の時間が終わっても働いているAさんに対してBさんは
『まだ働いているの?』と言う。

Bさんは『こんな時間まで働いて偉いね。』というつもりで言ったのに、
Aさんは『早く帰れ!いつまで仕事をしてるんだ!このノロマ!』
と、攻撃されているように感じてしまう。

同じ言葉なのに自分が相手をどう思っているかで解釈が変わってしまう。
自分の思い込みで自分を殺すことも生かすこともできる。」

.....

始まった。

またかなめの「わかるような・・・わからないような・・・」
の話が始まった。

かなめは普段話を聞いているだけなのだが、
こういう話を時々する。

これってやっぱり俺に何かしてくれてるんじゃないか?
何というかこの話にヒントが含まれている気がする。

あと、かなめは微笑みながら話してくれる。
とても温かい微笑で。

この微笑みもすごく力をくれるものだ。

すべてを許してくれてすべてを認めてくれるような微笑。

う～ん、やっぱりいろいろとしてもらっているな～
と、改めて気づいた。これを言おうと思ったけれど止めておいた。

同じ年の男の笑顔に癒されるってなんだか変だし。
俺は女が好きな普通の男だし！！

翌日。

俺は元気に仕事をしている。

今日はいいことがあった。
トイレで社長に会って、褒められたのだ。

「なんだか最近はりきってるな～、
あ～元気があっていいね。この調子でがんばってね。」

社長はぶっきら棒で言い方はキツく聞こえるし、顔の表情はいつも厳しい。
だからいつも怒っているように見える。

でも社長から席が近くて、
よく怒られた俺は社長の微妙な変化に気づくようになっていた。

怒っているように見えて怒っていないことがあることや
怒鳴っているけれど冗談交じりで脅しているだけのことを俺は知っている。

今の言い方も厳しい声だから怒られたように感じる人もいるだろう。
でも社長はぶっきら棒なだけで褒めているつもりなのだ。
とてもありがたくて嬉しかった。

今日は席が近い女性社員が休み。
どこか旅行に行っているらしい。

いつも会社にくる電話は女性社員が電話をとっているのだが、
女性社員がいないときは下っ端の俺が電話を取る役目だ。

電話を取るのは嫌いだ。俺がいる場所は重役がいる場所。

だから重要な電話が多いのだ。
相手に不快感を与えないように慎重に電話にでなければならない。

あれこれ考えてしまって緊張するのだが、
今日はリラックスして電話に出ることができて
自分で考えすぎているだけだな～と思った。

苦手だった電話にホイホイ出られるようになった。

ブルルルル・・・

任せろ！電話もチョロイもんだね～俺も一人前だ！

なんて調子の良いことを考えながら電話に出る俺。

■第10話『誰が悪いの？』

昨日、調子にのって電話に出たら悪いニュースが入ってきた。
電話なんてでなけりゃ良かった。
よりによってなんで俺が電話をとったときに・・・

悪いニュースとは、七村さんが亡くなったという連絡だった。

死因はガン。

七村さんは余命身近いことを知っていたけれど、
働き続けたいと言っていたらしい。

『がんばってね。ボクもがんばるから〜フフフ・・・』

言われた言葉が思い浮かぶ。

七村さんは何をがんばるつもりだったのだろう？
仕事だろうか？生きることだろうか？それとも何か別のことだろうか？

『すべては学びだよ。必要な学びが現実にかかるの。』

いつだったかなめが言っていた。
これも学びなのだろうか？

学びのために七村さんはなくなったのだろうか？
だとしたら・・・なんというか・・・
残酷すぎる・・・悲しすぎやしないだろうか？

『すべては自分が作っているの』

かなめはこんなことも言っていた。
俺が七村さんの死を望んだのだろうか？

1年前に友達が死んだのも俺の何かの学びなのだろうか？
学ばない限りどんどん人が死んでいくのだろうか？
友達の死も七村さん死も俺が作ったものなのだろうか？

いろんな言葉が浮かぶ。その度に言葉の意味を考えてしまう。

今日は気持ちが落ち着かない。ふわふわしている。
自分が何をしているかわからない、夢を見ているような感覚。
何をしたのか全く覚えにないが、気づいたら一日が終わっていた。

いつもなら気分が落ち込んでいるとき、かなめに会いたいと思う。
でも今日は会いたくなかった。

願いが叶って今日は会わなかった。
俺が願ったから会わなかったのだろうか・・・

かなめに会えば元気になれる気がする。
笑顔ではげましたりしてくれると思う。
今すべきことを教えてくれるような気がする・・・

でも、俺は普通の人間だ。だから悲しんだり落ち込んだりする。
正論を言われたって困る。
すべてを良い方に解釈なんてできないし、いつも元気ではられない。

今すべき正しいことがあるのかもしれないけれど、
正論に振り回されて人間らしさがなくなっていくなら、
俺はそんなものいらない。そんな窮屈な考えは捨てる。

かなめの笑顔を思い出すと、妙に腹が立った。

いつもニコニコしているあいつには悲しみも怒りもないのだろう。
俺もあんな風になれば、どれほど楽だろうか？
どれほど楽しく生きられるだろうか？

何であいつは俺と同じ年であんな笑顔でいられるんだ？
何で俺はあいつのようになれないんだ？
どうして俺はできないんだ？

こんな何もできない俺の気持ちはきっと誰にもわからないのだろう。
どうせ、俺は誰にも理解してもらえないさ・・・

数日後、会社を休んで七村さんの告別式に出た。
お通夜は会社が終わってからでも行けるから、
会社の人も何人か行くようだった。だから素直になれない気がした。

知っている人が誰もいない告別式なら、気にしないで泣ける気がした。

■第11話『俺一人の力でも』

告別式に来て、七村さんが亡くなったことがわかった。
もちろん亡くなったから告別式に来ているのだけれど、
情報が間違っているんじゃないか？
本当は別の人が亡くなったんじゃないか？

心のどこかでそんな期待を持っていたんだ。

でも、遺影は間違いなく七村さんだった。
そして、遺体も・・・

七村さんが亡くなったことを実感したら、
俺は大声で泣くと思っていた。

でも、思ったより悲しくなくて、
とても不思議な気持ちだった。

告別式では七村さんはこうだったとか、ああだったとか、
こういう人だったとか、いろんな人が話している。

俺のイメージにはない七村さんだ。
よくよく考えてみたら俺は仕事をしている七村さんしか知らない。

家では何をしているのか？
どんな風に酒を飲んでいるのか？
趣味は何か？
何があって今の仕事をしていたのか？

何も知らない。こんなときに不謹慎だけれど、なんだか楽しかった。
そして、七村さんがまだ生きているような気がした。

だって、みんな七村さんが生きているかのように話すんだもん。
仲間内で飲み会をやっていて、来ていない仲間の話をしているだけ、
そんな感覚。

「七村さんは俺達の心の中に生きている」
よくある話だけれどそんな感じ。
誰かに言われたわけではなく、そう感じた。

俺の中の七村さんと、
告別式でマイクもって話している人の七村さんは違うけれど、
生きているんだ。そして、いつかまた会えるんだ。

人が亡くなって悲しむのは、その人と二度と会えないからか、
その人の死が悲惨なものだったから、
この2つぐらいじゃないかと思う。今の俺はどちらでもない。

七村さんはもう亡くなった。でも、必ずどこかで会えるし、生きている。
きっとどこかで今も笑っているに違いない。
今すぐ会えない寂しさはあるけれど、
会えるとわかっているから悲しくない。

ものすごく矛盾している考えで、自分でも理解ができない。
でも自分の感覚は七村さんの死と生の両方を感じ取っている。
とにかく、俺は悲しむ必要はないのだ。

そして、誰かのせいにすることもないし、
誰かを傷つける必要もない。

『すべては自分が作っているの』

また、かなめの言葉が浮かぶ。

七村さんが亡くなったのは俺のせいかどうかはわからない。
でも、その後の生き方は俺が決められる。俺が作れる。

誰も俺の気持ちはわからないって勝手に決めてた。
全てが敵だと勝手に思って、勝手に悪者にしてた。
でも、それは俺が勝手に思ったことで本当のところはわからない。

そうやって人を責めて、自分も責めて孤立して、
辛い生き方をする道もあったのだろう。
でも俺は別の道を選んだ。
別の道で楽しく生きる道を俺は作れたのだ。

告別式に来てよかった。
一人で来てよかった。
一人だから感じられたこともあっただろう。

あと、七村さんの告別式だったからかな？

昼過ぎに告別式が終わり、七村さんに感謝をしながら、
晴れやかな気持ちで帰って家に帰った。

そうだ、この話をかなめにしてやろう。
いつも悩みや愚痴を聞いてもらって、
かなめのおかげでいいことに出会えた。

でも、俺一人の力でもいい考えになることもできるし、
楽しく生きる道を選べるんだって教えてやろう。

■第12話『十分』

今朝、かなめに会った。
いろいろと話をしたかったけれど、あまり出来なかった。
原因はかなめが言った言葉にある。

「いや〜ボク・・・急な転勤になっちゃった！
もう、明日から引越すんだよね〜」

苦笑いしながらかなめは言ったけれど、
俺は笑う気分にはなれなかった。

「え・・・あ・・・そう」

と、そっけない返事をしただけで口を閉ざしてしまった。
何を言っているかわからなかった。
と言うか頭が混乱していてそれしか言えなかった。

その後は電車に乗ってもずっとかなめが話していた。

かなめの転勤は先週決まっらしいが、
俺に会わなかったので言えなかったそう。

やっと会えたと思ったのが引越し前日の今日だった。

「でもま〜お別れ一つも言えないよりはいいよね〜あはははは〜」

妙なところでマイペース(?)なのがかなめらしいと和んでしまった。
かなめの話しが終わるとちょうど俺が降りる駅になった。

転勤か・・・

引越しか・・・

「転勤」「引越し」「かなめには会えなくなる」
それしか頭になくて、他に何も考えずいつも通り俺は電車を降りた。

引越して言葉は小学生や中学生以来の言葉だ。
「お父さんのお仕事の都合で・・・」
大抵引越しの理由はお父さんの仕事だった。

昔はお父さんなんて悪者みたいなものだったな。
でもお父さんは汗水たらして一所懸命仕事していたんだろうな。
時には仕事が嫌になりながらも、
家族のためにがんばっていたに違いない。

ん？

仕事が嫌になりながらも？

その時、自分はその「お父さん」と同じ立場にいることに気がついた。
同じ社会人なのだからいつ仕事の都合で引越ししてもおかしくない。

自分はまだ社会人2年目で、子供だと思っていた。
半分学生気分で、自分には責任がないと思って仕事をしていた。

でも、中には同じ年で仕事を任せられているやつもいるし、
妻子がいるやつもいる。

自分もそんな年なのだ。
いつまでも子供のままではいけない。
いつまでも甘えたままではいけない。

そんな当たり前のことに何故かこのとき気づいた。

そして、他のことにも気づいた。

・・・・あれ？

かなめって何処に引っ越すんだろ？
今日ご飯食べる約束しなかったじゃん！！

もしかしたらあれで会うのは最後か！？

焦った。

かなめにはまだ言いたいこともあるし、
これからもずっと友達でいたいと思う。

なのにこのまま音信不通になったら

一生会えないかもしれないじゃないか！

仕事中だが、急いでトイレに駆け込んで個室に入り、
携帯からメールを送ろうとする・・・

が！！

そうだった！

俺はかなめの連絡先を知らないのだった！！

いつも朝会って、その夜食事をするという流れだったので
連絡する必要がなかったのだ。

今度は連絡先を聞こうと思うことはよくあるのだが、
かなめがいないところで思い出す。
何故かいつも、かなめに会うと忘れてしまうのだった。

えーーーーー！じゃあもうホント会えないのかよ！！！！

・・・いや、待て！きっと方法はあるはずだ。
まだ時間はある。

きっと方法はあるぞ～

考えたらかなめの家も知らないし、職場も知らない。
自分がかなめのことを何も知らないことに気づき、
どうして今まで何も疑問を持たなかったのか？

とても不思議だったが、
そんなことを考えるよりもかなめに会う方法を必死に考えた。

・・・

結局、ロクなアイディアはでなくて、
駅でかなめを待つことにした。

駅の改札を出て出てくる人を見張っている。
電車が来る時間になったらまばたき一つしないで見てるぞー！

なんて意気込んでいたら・・・

遠くにかなめの顔が見えた。
かなめは・・・

微笑んでいた。

たった一瞬のはずだけど、
俺にはとても長い時間を感じられた。

一瞬だけど、時の流れない世界に踏み込んだ感覚・・・

その世界でかなめは微笑んでいた。
かなめの微笑みは言葉では語れないことを全て語った。

余計な言葉を言うよりも、とても大切なことを語ってくれた。
そして、俺が伝えたいことも全てわかってくれた。

俺は言葉では言い表せないものを受け取った。

これがなんなのか、やはり言葉では言えないけれど、
でも俺の胸の中に確かにある。

とても温かくていいものだ。
これがあるから、俺は前に進める。
別れを悲しまないでいられる。

たった一瞬だけれども、とても長い時間。

俺にはそれで十分だった。
多分かなめも十分だっただろう。

かなめは俺の視界から消えた・・・

■第13話『神様が降りてくる』

最後になめと会ってから半年ぐらい経つ。
俺は今も変わらず会社員で、同じ会社の同じ部署で働いている。

かなめとは連絡を取る手段がないので、
かなめから連絡が来るのをひたすら待つしかなかった。

何故今まで不便さを感じなかったのか？
何故かなめと会ったとき連絡先をきかなかったのか？
家や勤務先をきかなかったのか？

普段なら必ずきくはずなのに、
きかなかったのがとても不思議だ。

半年の間に、何人かの中学時代の友人に会った。
かなめについて話をしてみたり何か知らないかと訊いてみた。

「かなめ？ う～ん・・・覚えにないな～」

「何組だったっけ？ 俺同じクラスになったことないんじゃないかな～」

みんな覚えていないようで反応は微妙だった。
同窓会に来ていたやつもいたが、同じような反応だった。

「集合写真は？」

と、一人の男に言われた。

そういえば中学生のころ、年度が変わったときや体育祭などの
イベントの後にクラスの集合写真を撮っていた。

押入れの奥底から引っ張り出して写真を見てみたが、
かなめの姿はなかった。

俺の記憶にある同じクラスのかなめは？

俺の記憶は確かなものではなく、
誰かにとってつけられたもののよう感じた。

誰も覚えていない。

写真一つない。

そんなことがあるのだろうか？

もしかしたら「覚えていない」のではなくて、
最初から「誰も知らない」のではないだろうか？

お金があれば月へ行ける時代に
そんな非科学的なことがあるのかと思ったが、
そうだったら面白い。

かなめの独特の雰囲気は人間じゃないものだから
感じられたのかもしれない。

変な話だけど・・・
神様かなんかが天から降りてきて、助けに来てくれたのだ。

あのときの俺の考えは暗かったから
「お前！考えが暗いぞ！」って。

神様はいきなり俺の前に現れることができなかったから、
俺の記憶をいじってうまいこと溶け込んだのだ。

連絡先や勤め先はきっと神様の国で、
きかれると困るから俺にきかれないようにがんばっていたに違いない。

しかし神様と言ってもかなめ。

意外とおっちょこちょいのところもあるから、いろいろとボロが出て、
今になって俺に存在を気づかれそうになっている。

今頃「ふ～、あぶなかった～」とか言っているかもしれない。

もしかしたら誰もが神様に会っているのかも知れない。

きっと、困ったことがあったら神様が降りてくるのだ。

そして、人生が良い方向に向いてきたら神様は消えて、
神様の記憶も消されてしまうのだ。

記憶を消し忘れられた人や、うまく記憶が消えなかった人は
「宇宙人につかまった」とか言っているのかもしれない。

すごく子供じみた解釈だけど、
こうした夢があるのもいいかなと思った。

時々かなめを忘れそうになることがある。
でも、絶対忘れない。覚えてる。

いつでもかなめが戻ってこられるように。
かなめの居場所を作っておくんだ。

かなめ・・・

俺はお前と会う前と、何も変わっちゃいない。
中小企業の普通の会社の平社員。
会社も変わってないし、仕事内容も変わってない。

神様がついてたにしちゃ～随分とちっぽけな人間だ。

神様がついてたのなら億万長者ぐらいにはなりたいものだ。

ん？
じゃあやっぱり神様じゃないのかな？

ま。どちらでもいいか。

どっちにしても前よりマシな生き方になったと思う。
今日も楽しく会社に向かえる。
今が楽しければ、将来もずっと楽しいだろう。

10年後も20年後も充実した楽しい日々を過ごしているさ。

かなめと会っていた駅で、今日も俺は電車に乗る。

■あとかき

どうも。このお話、「神様が降りてくる」を書いた
三条翔也（さんじょうしょうや）です。
お楽しみいただけたでしょうか？

前作、「宇宙から来た友達」を書き終えた直後に1部の構成はできていました。
しかしながら陸上競技の説明がやたらしつこくなるので書くのを止めました。

書くということ自体もうないかな～と思っていましたが

「何か書かないの？」
「書かないのはもったいない！」
「そろそろ書いてよ！」

というありがたい声や、”本当に面白い作品を作りたい！”
という自分の中の気持ちが膨らみ、書くことを決めました。

特に何を書きたいという気持ちや考えがあったわけではありません。
3部作とかいいな～と考えて、昔作った1部をひっぱりだし、
続きと言うことで2部、3部を考えました。

いざ、書こうとすると1部はノリが悪いので、
3部・2部・1部の書きやすい順番で書きました。

結局1部はどうもうまく書けないので話が強引に進んでおります（汗）
おかしかったら笑ってください（笑）

話は全て1つの部ごとに完結しているし、書いた順と言うこともあるので、
3部、2部、1部の順で話が進んでいくのも面白いかと思ったのですが、
読みづらいと言う方もいそうなので却下しました。

面白いとは思うんですけどね～
興味があったら3部から読んでみてください。

一応1部から3部まで話はつながっています。
どの話にも「かなめ」が出てくるのですが、
3部の「かなめ」は違う人かもしれません。

当初、2部の最後に生まれた子供が成長した姿と考えていました。
しかし、3部の主人公タカオが2部の主人公タカユキの第二子で、
家の神になったかなめが助けに来た、と言うのもアリかと思いました。

タカユキとタカオって名前がなんだか似ているし、同じ苗字ですからね。
なんか悩みも似たり寄ったりだし（笑）

他にも、神様とは全く関係ない通りすがりのかなめさんかもしれないし、
神様が「かなめ」と言う人の体を借りたのかもしれない。

いろいろと考えがあっていいと思います。
読者の考えほど答えがあるということです。

答えがあるものも楽しいと思いますが、
自分で好きなように答えやその後の話、
サイドストーリーを考えて良いとしたら、
物語の楽しみ方が十人十色できます。

それも一つの物語の魅力で、一つの楽しみ方、楽しさだと私は考えています。
是非あなたなりの物語を作って楽しんでみてくださいね！

いろいろと未熟な点がありますが、設定は面白い作品だと思います。

文章やキャラクター設定をもう練りこめば
もっと面白くなる作品ですが、今の私の腕ではこれが限界です。

私は考えるのは得意なのですが文章と言う形にするのはどうも苦手です。
私は原案だけで、うまく形にしてくれる人がいたら
すごく嬉しいな～と思います。

哲学書を書きたいんだけど、ただ哲学書を書いたんじゃつまらないから
何かストーリーを付け加えて面白くしていろんな人に読んでもらいたいな～
と言うような

『伝えたいコンテンツはあるんだけど、面白く表現できない』
という方に物語やアイディアをあげるのもいいかなと思っています。

そういう方がいらっしゃったら、是非ご連絡ください。
お待ちしております。

・・・と、いつのまにか私的なお話になっていますね（汗）

私的なお話のついでにさらに2点（笑）

面白いな～と思ったらこの話をどんどんお友達に紹介してください。
たくさんの人に読まれることは本当に嬉しいことですからね。

また、多くの人に手にとってもらえるよう、小冊子販売もしています。
1部、2部、3部とバラ売りです。
それぞれ価格は同じで、10冊～：5,000円～で販売しています。
注文は10冊以上から受け付けています。
1冊だけ欲しい場合は10人お友達を集めてください（汗）
またはお友達に配布用として購入してくださいな。

全編1人で集めると15,000円もしてしまいますが、
身銭を切ってそこまでしてくれるのなら
きっと神様からのご利益があるでしょう（笑）

注文は最後に記載してあるメールにて受け付けています。
お届けまで1ヶ月ほどかかってしまう場合もありますが、ご了承ください。

最後になりましたが、
こんなところまで読んでいただいてありがとうございます。

”本当に面白い作品を作る”という想いが私にはあります。
面白い作品を提供して笑顔になる人を増やしたいのです。

まだまだ未熟で力不足の私ですが、
この作品があなたの笑顔に少しでも貢献できたら幸いです。

三条翔也

【三条翔也プロフィール】

大学卒業時に今の自分の素直な気持ちを残そうと詩を書き始める。
難なく就職し、会社員をしていたが、とある本との出会いにより、
自分の生き方に疑問を持ち始める。

何かをしたいと思っていたときに以前自分が書いた詩を見て、
これが多くの人の心を救うと感じ、詩集を出版。

以後、作家、コンサルタントとして活動している。

相当の気分屋で、気分が向いたときにやりたいことをやる、
というのが基本スタイルで、あまり肩書きや物事にとらわれずに活動している。

メルマガ

『ちょっといい自分になる一言』

<http://archive.mag2.com/M0055636/index.html>

著作物

「宇宙から来た友達」

<http://hp.did.ne.jp/ahuro2/>

(携帯サイトです見づらいですが、パソコンから見られます。)

感想・連絡などはこちら。

ahuro2@mail.goo.ne.jp

※小冊子購入の場合は

■お名前

■郵便番号

■住所

■電話番号

■注文部数

を必ず記入ください。

尚、個人情報については小冊子配布のためにしか使いません。
小冊子を配布したら私が責任を持って情報を破棄します。

【おわりに】

いかがでしたでしょうか？

以上が、わたしが友人である三条翔也さんにしつこく頼みこんで、無料レポートとして配布することを許可していただいた小説、「神様が降りてくる」のすべてです。

わたしたち人間という生き物は、不完全な存在です。
どうしてもなく愚かで、弱さを抱えたやっかいな生き物です。
自分の現実自分で作っているのだと頭ではわかってはいても、どうしてもなく無責任で易きに流されるわ、正直に生きることが大切と知っているくせに、その場しのぎの嘘をついてごまかしてみたり、努力が嫌いなくせに自分よりも結果を出しているほかの誰かに嫉妬してみたり、どうしてもなくわがままだったり、ひがみっぽかったり。

それと同時に、結局のところは憎み切れない愛すべき存在。それが人間という生き物である。

翔也さんのこの小説「神様が降りてくる」は、そんなどうしようもないわれわれ人間に、ときにはイラつきながら、あるいは呆れはてながらも、それでもなおあたかなまなざしを注ぎ続けてくれる誰かの存在を教えてください。

その誰かとは、宇宙のどこか、はるか銀河系のかなたから語りかけてくる摩訶不思議な大いなる存在かもしれませんし、あるいは、あなた自身の中で、あなたとともに泣き笑いし、時には悩み苦しむ、小さなささやき声の主かもしれません。

翔也さんのこの小説をきっかけに、いつもほかの人がどう思うかばかりが気になってしまっているあなたも、ときにはたちどまって、いつもはないがしろにしまっている自分のこころの声に耳を澄ませてみる、そんなひとときをちょっとずつちょっとずつ持っていただけるようになっていただけたら...

こころを扱う専門家のひとりとして、こころから願う次第です。

心理カウンセラー・代替療法セラピスト

このはなさくや

- メインサイト: <http://www.konohanasakuya1.com/>
- メルマガ「True Love～真実の愛～」: <http://www.mag2.com/m/000082886.html>
- ブログ: <http://solar-lunar.livedoor.biz/>
- 女性専用無料メールセミナー(全 12 回)「True Love～真実の愛～」
ご登録はこちらから→ <http://truelovesakuya.seesaa.net/>

【わたしたちのメルマガジンをぜひ読んでみませんか？】

三条翔也『ちょっといい自分になる一言』

「ちょっといい自分」とは「本来の自分に近づくこと」です。
本来の自分でいれば困ったことは起こりません。
仕事も、お金も、人間関係も、恋愛も、全てが楽しくてワクワクした生活になります。

このメルマガでは本来の自分になる手伝いをします。
ちょっといい自分になって、新しい結果を生み出しませんか？
我慢していることがある、言いたいことが言えない、理解してもらえない、
寂しさ・苦しみを抱えている、愛されていないと感じる、
自分を好きになれない、そんなあなたは是非読んでみてくださいね。

◎ご登録⇒ <http://archive.mag2.com/M0055636/index.html>

このはなさくや『True Love～真実の愛～』

恋愛・心理カウンセラーが伝授する、真実のパートナーの引き寄せ方。
真実のパートナーシップの育み方。
あなたがパートナーをこころから抱きしめる時、あなたは世界を抱きしめています。

◎ご登録⇒ ⇒ <http://www.mag2.com/m/M0082886.html>